
脳内ペット

翠時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脳内ペット

【Nコード】

N6691P

【作者名】

翠時

【あらすじ】

ちよつとした勘違いから国家機密組織に目を付けられた上に…称号！？…俺が一体何をしたっていうの！？…英雄！？冷酷な獅子！？…違います！！俺は単なる高校生ですよ！！

誕生の日

っ…っいに！

ついに買(飼)いました！

「脳内ペット」！

いやあ…前から欲しかったんだよね。

みんな飼ってるらしいし！

すごい人気だよ！

あっ…

自己紹介忘れてました。

俺は「山田秀」ヤマダシユウ…普通の名前だからって笑わないでくださいね…

これでもきつと由来があるんですよ。

多分秀才になってほしいとか…

…あれ？

…母さん、父さん…

「ごめんなさい…」

うん、謝ったからもついいよね。

実はあまり時間がないから端的に済ませなくてはならいんです。はい。

そんでもって…俺はごくごく普通の高校生。

普通に勉強して普通に遊ぶ普通の高校生だよ！

…み、みんなからの目が冷たいのは触れちゃいけないところだよ！

話を戻して…さっき言ってた「脳内ペット」っていうのは、まあ脳内になんか部屋をどうとか（医学的なことはわかりません！）すること、脳内でペットを飼う事が出来るんです！

もちろん、他の人のペットと遊ばせたり出来るらしい（だって誰だって1人は寂しいもんだよ。そういうのは僕が一番知ってる。）

まあ面倒なことは省略。

あと数十秒で生まれます！

最新型で猫型のかわいいかわいい俺のパートナーです！

ちなみに、猫だけどとりあえず卵に入っています。

生まれたときからまあまあ大きさです。だって、リアル赤ちゃん猫が生まれてきたら将来どんな猫になるのか想像つかないじゃん！

やっぱり開発者も「かわいい！」「っていうリアクションを求めているんだよ。きつと。

おっ！あと20秒！

ついにこの瞬間が来ました！

山田秀もやつと時代に追い付くことが…

「秀〜！ご飯よ！」

か、母さん？

…飯ってまだ5時30分ですよ？早くないですか？

…いや、早いだろ！というか、そろそろ生まれ…

つて、あああああああ！

生・ま・れ・とるゝ！

完全に出落ちつてやつだよ！これ！

生まれる瞬間見届けてないよ！

…というか、なんで母さんはこんなタイミングで話し掛けてくるの
！？

いや、母さんのせいにするのはやめよう。

俺はそんなひどい人間じゃない！

…うん、少なくともそう信じてる。

ま、まあ…では気を取り直して…俺のパートナーとご対面しましよ
うか…

ニユッ…

『ギョフッ…』

…あれ？

…これですか？

…うん、怒っていいよね？

まず…

キモいんだよ！

なんだよこれ！？おっさんじゃん！

そこら辺にいるおっさんに猫ヒゲ生やしただけじゃん！

全然ダンディーでもない50代くらいの普通のおっさんだよ！

しかも『ギユフツ』ってなんだよ!?

完全に酔っ払ったおっさんみたいな声じゃん！

『ギ…二…二…ヤー!』

…えーっと、簡単に説明しますね。

多分おっさんは『ニヤー』って言おうとしてこうなったんだろっね。
うん。

でも…想像してください…

おっさんが猫ヒゲ生やして『ニヤー』って言ってるんですよ！

…ごめん、目から温かいものが出てきちゃったよ…

嬉しいとか感動とかじゃないよ。

ただ…悔しいんだよ…

『ギユフッ』

ってなわけで…

母さんには申し訳なかったですがあの後すぐに家を飛び出し、ペックトショップの前まで来ました。

何故かって？

そりゃあ…

返品だよ返品！

不良品にも程がある！

俺はかわいい猫を求めてたんだ！

決しておっさんなんか求めてない！

カラン

「いらっしやいませ〜」

うん、このかわいい店員さんの満面の笑みと脳内にいるおっさんには申し訳ないけど俺にはこれしか選択肢がないんだよ。

「あの…」

「は、はい…」

「さっき脳内ペット買ったんですけど…」

「ああ！はい！覚えております。…えつと…どこか問題点が？」

「問題点というか…確か僕猫買いましたよね？かわいいかわいい猫が生まれてくるんですよね？」

「はい。そのはずですが。」

「でも…なんかおっさん生まれちゃったんですけど…」

「おっさん？…もしかして…しょ、少々お待ちくださいー！」

スタタタタッ

あれね？どっか行っちゃったよ…

やっぱり商品にケチ付けちゃいけなかったのかな？

…いや、大丈夫だよな？

うん、別にケチじゃないもん！

…

…

スタタタタッ

「はあ…はあ…」こちらのお客様です！

えっと…なんだろうね？

このエキサイティングな状況？

ただいま、店員の女の人が走ってきました…

そしたらなんと…

後ろから怖いお兄さんたちがたくさん歩いてきました！

…俺なんか悪いこと言いましたか？

…いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや！

なんにも言っていないよ！俺まだ死にたくないよ！

べ…別にケチ付けたくて来たんじゃないんだよ！

ただこれが猫だって言われたならそれで納得するから殺さないで！

「…おい」

「は…はい…なななな…なんでしょうか？」

嫌だ〜！殺される〜！
死ぬくらいならおっさん返さないから許して〜！

「おめでと〜」

…え？

何これ？

何で手なんか差し出してるの？

「えつと…」

「ああ…まず説明しないと。アンタ…あつと申し訳ない。お客様の脳内で生まれた『おっさん』というのは、3000万匹に1匹以下の確立で生まれる突然変異の人型高等知能脳内生物で、世界でも他に一匹しか確認されていません」

…いや待て。

俺はかわいい猫を求めているんだ！どんだけレアなんだか知らねえがおっさんなんか必要ねえ！

「そ…それで？」

「かわいがってあげてくださいね（ニコッ）」

…はあああああああ！？

何かわい笑みを浮かべながらとんでもない事言っちゃってんの！
？この店員さん！？さっきも言ったけど俺はかわいい猫が欲しいの！
おっさんなんか…

「ね？（ニコツ）」

…かわいいすぎるだろこの店員さん。
こんな人に頼まれたら…

「は…はい…」

つてなるじゃん！

あああ…ついにコイツを手放せなくなっちゃったじゃないか！

その笑顔は罪だよ！

ちよつとは自覚しなさい！

カラン

はあ
…

さよなら俺の高校生活…

成長と間違い 1

I n s i d e

…えっと…

通学中で暇なので先日のをかなり端的に説明しますね。

…俺の脳内におっさんが住み着きました！

これだけ！

はい、振り返り終了。

うん、この地点では特におっさんに異変は無かったよね？

え？何でこんなこと聞いたのかって？

ああ…それは…

俺が朝起きた時からおっさんの様子が変だからです！

『だから！さっさと名前決めろって言ってんだろ！この怠け者が！私の怒りが頂点に達するまでに名前を決めなかったら脳内ポロポロにするぞ！わかったかこの怠け者！Mr・怠け者！』

…うん、俺が寝てる間に何してたの？この子？

ニヤーも言えなかったおっさんが何で翌日にこんなにしゃべれるの！？

『そんなのは昔の話だろ！過去を振り返ってる位なら今の私の名前を考えると知っているだろうが！このたわけ者が！』

…あのさ…割と量喋ってるように感じるけど実際「名前を付ける」しか言っていないじゃねえかよ！

『知るか！文句言ってるでさっさと名前決めろ！』

うっさいなあ…

じゃあ名前は「おっさん」でいいな？

『…お前はこのかわいいかわいい猫ちゃんに、似ても似つかない「おっさん」っていう名前を付けるのか！』

いやいや！お前どっからどう見てもおっさんだからね！かわいいかわい猫ちゃんなんかじゃないからね！

『…な、なんとという侮蔑的な発言！脳内ポロポロにすんぞ！』

やれるもんならやってみろ！この糞シジイ！

『な…なぬっ！お主今なんと！？』

だ・か・ら！さっさと脳内ポロポロにしてみるや！この糞シジイ！

『ああ！許さん！このかわいい猫に対して糞シジイだと！？キイイ！いいだろっ！やってやるっじゃないか！ニヤアアア！』

今さらニヤーなんて言っても無…

……

あれ？体が…

『ニヤハハハッ！見恐れしたか！？私はお前の脳内にいるからお前の動きくらい簡単に制御出来るのだよ！そのまま池に落ちてしまえ！ついでに堕ちてしまえ！』

最後のなんだよ！？

とつかさつさと止める！

『私の知ったことじゃないな！』

いや、止めるよ！周りの人めっちゃ冷たい目で見てるから！

『おお〜人気者じゃないか！…さあお集まりの皆様方！後5秒で山田秀が池ポチャします！刮目せよ〜！』

「刮目せよ〜！」

『あつ…口まで制御しちゃった…』

…まっいいか？』

ポチャッ！

Outside

プルルル…プルルル…

ピッ…

「もしもし…」

『おう…ニコラス…そつちの様子はどうだ？』

「今のところ異常無しだ。予定通り作戦を実行する。エリックの方は？」

『同じく異常無しだ。リーダーにも奴以外の反応はない。これは俺ら第6チーム初の総理からの依頼だ。失敗は許されない分チャンスでもある。最弱のレットルを貼ってる奴らを見返すチャンスだ。頑張ってくれ。』

「エリック…お前はいつも話が長いくせがある。気を付けなよ。そして、任せとけ！俺が必ず奴を捕える！」

『さすがだ。頼んだよ。』

「あっ…あと、リーダーのデータをこっちに転送出来るか？位置情報欲しい。」

『わかった。30秒待ってくれ。すぐに転送を開始する。では電話を切る。健闘を祈るよ。』

「ふっ…任せとけて…」

ブツツ…

プー…プー…プー…

さて、敵は今現在あの池の中に身を潜めている。

データベースによると身長は183センチ、体重71キロ性別は男性。いわゆるスパイで国家機密情報を握ってる可能性があるため、被害を最小限に抑えられるよう捕虜するようにとの依頼が総理直々に来た。

それもそのはず。この情報流出事件の発端は総理にあるといってもいいのだから。

しかし、総理としても上位グループ（第1グループや第2グループなど）の信頼を失うことは危険である。そのため、俺ら第6グループに極秘任務として依頼してきたと考えるのが自然である。

…ピッピッピッ！

受信完了…

プー…

…早いな。
では、簡単に作戦を説明する。

今回準備したのは耐水麻痺網弾という武器で、着水直後に銃弾が拡散、半径3メートルの円状に網を広げ、その後、再度鉛直方向に落下させることにより網を立体状に降下、対象物が触れた瞬間に麻痺させるという武器である。

ただし、問題なのは、もし一発目を外し、二発目が一発目と接触してしまった場合に双方の麻痺性能が失われてしまうということだ。

つまり、半径6〜7メートルであるこの池では一発目をかなり岸側に打ち込まない限りチャンスは1回も同然なのだ。

ブルルル…

ピッ…

「エリック？どうした？」

『レーダーをよく見ろ！ステルスだ！』

「な、何！？」

ピッピッ…

敵情報確認されていません…

消滅時刻…現時刻より14 / 3秒前…

ピー…

『どうする？最悪、別任務としてバックアップの準備をしている第5チームに連絡すれば大丈夫だとは思うが？』

「馬鹿野郎！池から出てないんだから大丈夫だ！池の端から効率的に網を打ち込んでいく。」

『おい！無理するな！下手なこととして失敗するよりかは…』

「『下手なこと』だと！？俺を信じれないのか！？何のためにあんなに訓練を積んだと思ってるんだ！？」

『…わ、わかった…任せるよ…ただ…無理はするなよ…』

ブツッ

…さあどうしようか？

敵の位置は分からない。

かといって、さっき電話で言ったように乱射するわけにもいかない。

奴のことだからすぐに武器の性能を見極め、網の真上に待機するであろっからだ。

しかし、これも第6チームのため…絶対成功させてみせる！

…しかし…どこを狙えばいいというのだ！？

…

…

「刮目せよ…！」

…えっ！？

だ、誰だアイツ！？

…馬鹿！その池は危険だ！奴が潜んでいる！

バシヤツ！

な…なんてことを…

一瞬の出来事だった。

少年は「刮目せよ」と叫び池に飛び込んだ。

奴が潜んでいる事を知らずに…

しかも奴のことだ。邪魔をするものは誰であろうと始末する。

つまり…少年の命は…

しかし、これが完璧に計算し尽くされた行動であった事をニコラスはすぐに理解する。

何と少年が浮かび上がってくると同時に気絶した奴も浮かび上がってきたのだ。

言い換えれば、少年が見事奴を捕らえたということだ。

…どこの所属だか知らないが、奴を狙っているのならば恐らく国家機密組織討伐班の一員なのだろう。

しかも奴を肉弾戦で捕らえるほどの技量…トップレベルなのは間違いない。

にしても、これは最重要極秘任務…情報が流出することは…

プルルル…プルルル…

『おい！ニコラス！アイツは何者だ！？』

「分からない…が、恐らく国家機密組織討伐班のメンバーだろう。」

『いや、それが…実はたった今データベースで調べていたんだが…それらしい人物は見つからなかった。討伐班どころか調査班、潜入班も調べたんだが一人として引っかからなかった。』

「何っ！？…わ、わかった。直接接触してみる。」

『敵かもしれない…気を付けろよ』

「ああ…」

ブツッ…

「さて、行きますか」

スタタタタ…

成長と間違い2

I n s i d e

あああ…やつちやったよ…

…いや！俺は何も知らないよ！何もやってないよ！…あれ？…やってないことはないけど俺は何一つ悪くないよ！

あつ…そうですね…簡単に説明しなきゃいけませんよね。

えーっと…例によって俺が池に飛び込んだところ…どうやら真下に人がいたようで…見事頭をクラッシュしてしまいました！

そしたら…その人死んじゃったのか、プカア…って浮かび上がってきちゃって…

周りの人は逃げるわその人は動かないわで…何か犯罪者になっちゃいました！

しかもその人変な恰好してるんですよ！

まるで某ゲームのスネ クミたいな服装して酸素ボンベつけて水中に潜ってたんですよ!?!
はたからみたら変人ですよ!

…いや、だからと言って殺しちゃったのはヤバイよね?

はははは…どうしよう?

『おい!お前が逮捕されたらそのペットである私の面目が丸潰れだぞ!どうしてくれるんだ!』

知るか!そもそもお前のせいじゃねえかよ!

しかもお前に面目なんてねえだろ!

『あるわアホ!それにヘッドショットしたのはお前じゃボケエ!すべてはお前のせいじゃこの愚か者!』

…っ!テメエさっきから調子乗りやがって!もし…

『おい!誰か来たぞ!』

…嘘！！…け、警察だ〜！嫌だ〜！逮捕されるよ！俺無実なのに逮捕されるよ！

「…おい」

「ああ！？誰だテメエ！？」

…あれ？今のは誰の返事？俺の口から出たけど誰の返事？

『お前の返事だな。形上は。』

…「形上は」ってなんだよ！？お前が仕向けたのか！

『まあね ニヤ〜』

ざけんなああ！何初対面の人にひどい返事しちゃってんだよ！

もしこの人が取り調べの人だったらどうすんだよ！？

…っていつかキモいからもつ二度とニヤ〜って言うな！

『キ…キモいだと！？お前このかわいいかわいい…』

はいはい…それはもういいですよ…

「ふっ…いい返事だ。俺はニコラス。君は？」

…はあ！？

何普通にあの返事を受け入れちゃってんの！？

しかも名乗ってきたし…

…よし、さっきの挽回だ。出来るだけいいイメージを与えるように
言わなくちゃな…

「ふん、秀だ。よく覚えておくといい。」

なぜだああああ！？

おっさん！何でこんなに俺を窮地に陥れようとする！？

『うん、気分かな』

ふざけるな！

俺のキャラ崩壊寸前だぞ！どうしてくれんだよ！？

『知るか。そんなこと言ってる間にどうにかすれば良いじゃないか？』

そっか…って、何様のつもりだコラァ！

『雑なノリ突っ込みだな』

…そ、そこは触れてはいかんよ。

「わかった。覚えておくよ。それと…仲間になってくれないか？」

…うん、何これ？

えっと、ちよつと待ってね…展開速すぎて理解できん。

俺は人を殺した…そしたら警官が来た…すると突然警官が…「仲間になるう？」

うん、頭パニくってきたよ。ははは…

「…嫌か？」

いやいや！嫌じゃないですよ！

むしろ仲間になるうなんて言われたの初めてだからね！

「わかった。…そういえば、彼は死んでいないのか？」

うん、俺がっこいい。

今回はおっさんの変な力なしだけど、さすがにキャラがちよくちよく変わっちゃまずいからね！

クールに決めなくちゃ！

『全然クールじゃないぞ』

うん、1回黙ろうね。

「よかった。助かるよ。…ああ、彼なら大丈夫だ。君の見事な一撃
できれいに気絶してくれたよ。」

…いやいや！ちよい待ち！

「見事な一撃で」って何！？嫌味！？もしかしてそれ言いに来たの
！？

あああ、せつかくいい人間だと思ってたのに嫌味人間なわけ？

こう思うとなんか、イケメンなのも嫌味に感じてきたな。

無罪の人間をこんなにも嫌味に責めてくるなんて…

『いや、犯罪者だろ』

は？どこがだよ？

『ほら、この池この家の人の所有物だろ？多分不法侵入になるし、

それに人をヘッドショットしたんだから傷害罪、あと私に対する不敬罪。』

ま、まじか〜!?

最後のはスルーしてあげるとしても結構やばいんじゃないかな？

確かに人ヘッドショットしちゃったのは確かだし…

『ほら、こうやってスルーするところが不敬罪なんだよ!』

んなわけねえだろ!

なんでテメエを敬わなくちゃいけないんだよ!

『当たり前だろうが!この私を敬わず誰を敬うと言うのだ!?!』

いくらでもいるわ!

というか、お前以外の人間全員だよ!

『あああ…じゃあ尊敬してた人ヘッドショットしていいんだ?』

うう…

『さあどうなんだ？ちゃんと答えられるのか？』

うるさい！黙れ！

『出た〜！出ました！人間界独特の「逆ギレ」』

「…黙れ！」

あっ…声に出ちゃった…

『ああ、すまない私もちよつと頭に来ていたからな…勝手に制御してしまったよ。…でもこれで目の前の人との関係ボロボロだぞお〜』

…っ！ふざけんな！絶対わざとだろ！せっかく友達になつたんだぞ！

『ふん、私の知ったことではないな。そもそも…』

バンツ！バシツ！

「うっ…」

…はひふへほ？

今何したの？

バシツ！バシツ！

二…ニコラスさん？

なんでスネ ク殴ってんの？

…いやいや！ニコラスさん！追い打ちはいかんよ！俺の一撃で意外とダメージ貯まってるんだから！

「うっ…ぐふっ…」

…スネ ク完全にダウンしちゃったな…

「ふう…秀…だったかな？なかなか素晴らしい力だな。」

…ストーーーーーッ！

なに俺のせいにしちゃってんの！？

確かにこのシーンだけ見た人がいたら僕が殴った感じになっちゃうけど、さっきボッコボコにしたの見ちゃったからね！

完全に見てたからね！

殴ったの俺じゃなくてアンタだからね！！

「そんなこと言ってるニコラス君はどうなんだ？」

うん、クールに嫌味っぽく責めてあげたぜ！キラーン！

『気持ち悪…』

アンタは一回黙りましょう！

「くっ…やはり君ほどの人材となればお見通しなのか…わかってい
ると思うがあまり力は強いほうではない。」

…えええ！？

バレてないとも思ったわけ！？あんなに派手にやっておいて！

しかも、あれで力は弱いつてどういうこと！？

やっぱり俺の力の無さに対する嫌味なわけ！？

「ふん、あれだけ派手にやれば誰でも気付くだろう。では、俺はそろそろ学校に行かなくてはならないから…」

うん、早く逃げよう。やっぱりこの人危険だもん。

「そうか…さすがだよ。…ではこれを持っていてくれ。俺のバッチだ。新しいバッチが発行されるまではそれで我慢してくれ。」

…何この流れ？

…まさかポ モンですか！？

俺はポ モンの世界にでも入り込んだじゃったわけ！？

しかもあれってもらった後に新しいの発行してもらったの！？

初耳だよ！

今日学校で自慢しちゃおうよ！

「わかった。ではまた会うことがあればその時まで。」

「そうか。では何かあり次第連絡するよ。あと、彼を代わりに倒してくれたことに関しては感謝してるよ。では…」

スタタタッ！

あ…帰ってつた…

ん？

ちょっと待てよ…

「代わりに」ってなんだよ！？
やっぱりハメられたの！？俺！？

ふ・ざ・け・ん・なああああああ！……！

O u t s i d e

「おい」

どこか異彩を放つその少年に俺は話しかけた。

「ああ！？誰だテメエ！？」

…っ！？

さ、さすがだな…奴を一撃で仕留めただけはある…返事も力強い。

返事だけじゃない…この怒りに満ちた表情。

気を抜いていたら俺さえも殺られそうな勢いだ。

「ふっ…いい返事だ。俺はニコラス。君は？」

さて、どうだろう？

もしこれで向こうも名乗ってくれたのなら彼は敵でない可能性も高くなる。

名乗ってくれなかったなら…死を覚悟しようじゃないか。

「ふん、シユウだ。よく覚えておくといい。」

…なるほど助かった。この返事からすれば敵ではないようだ。

それに、所属バッチを付けていない。

…つまりは未所属ということか。

ならば、すぐ行動。

「わかった。覚えておくよ。それと…仲間になってくれないか？」

「……………」

…沈黙…か…

やはりすでに所属先があるのか？それとも味方でもなかったのか？

「嫌か？」

「わかった。…そういえば、彼は死んでいないのか？」

…これは…つまり承諾してくれたのだろうか？

…そうだろう。というよりそうだと信じておこう。

ということとは…ついに第6グループに優秀な人材が！

彼さえいればもしかしたら第1グループにも劣らない戦力を保持でき
きるかもしれない！

…話を戻そう。

彼…奴の状態について。

あれだけ見事な気絶だけを狙ったような一撃をしている。

死んでいるはずはない。

にもかかわらず誤って対象を殺してしまっていないか確認する。

…つまりは一種の余裕の表れなのだろう。

やはり、こういふところからも優秀な人材であることが浮き彫りになってくる。

「よかった。助かるよ。…ああ、彼なら大丈夫だ。君の見事な一撃できれいに気絶してくれたよ。」

前半が仲間になろうという誘いを承諾してくれたことに対する感謝の意。

そして後半が彼の質問に対する回答だ。

「……………」

ん？

どうしたのだろうか？

すでに怒りの表情が見受けられていたのは確かだが、俺が発言した直後、さらにその顔に「激怒」あるいは「殺意」ともいえる表情が浮かび上がった。

…も、もしかして気の障ることを言ってしまったのだろうか？

…ま、まさか…彼の状態に関する回答が誤っていたというのだろうか？

そしてすぐニコラスはその予感が的中したことに気付かされる。

「う…う…う…」

…っ！？

な、なんということだ！？

あれほどの一撃を受けておいてまだ立てるのか!?

なんと奴が突然うめき声をあげて立ち上がったのだ

俺はすぐに戦闘態勢に入る。

しかし彼、シユウは一切その気配を見せない。

「ふん…なかなかやるではないか…しかしこの私を相手にしような
ど…」

「黙れ…」

一瞬にして現場が凍りつく。

なんとシユウの奴の言葉を遮るその一言は武器のように奴をひるませたのだ。

ダッ!!

言葉に発してはいないが、おそらくはこの一瞬の隙で奴にとどめをさせということだろう。

そう判断した俺はすぐに奴のもとへ駆け寄り戦闘を開始した。

…無論、シユウの一言に気を取られていた奴は俺の奇襲への反応が一瞬遅れ、俺の腕でも奴を仕留めることができた。

「ふう…シユウ…だったかな？なかなか素晴らしい力だな。」

お世辞ではない。正直な意見だ。

あの状況で戦闘態勢を取らずとも奴をひるませる力。そして俺の推測ではあるもが、味方に功績を譲ろうとしたともとれる彼の行動には物理的、戦力的な力だけではなく人間的に素晴らしい力があると言える。

「そんなこと言ってるニコラス君はどうなんだ？」

…俺か？

やはりバれてしまったか…

俺の力…つまり、戦力的な力のことだが…やはり討伐班としての一般レベルには達していない。

「くっ…やはり君ほどの人材となればお見通しなのか…わかってい
ると思うがあまり力は強いほうではない。」

「ふん、あれだけ派手にやれば誰でも気付くだろう。」

…やはりか…少しは希望もあるかと思っただがきれいにバれていたよ
うだ。

「では、俺はそろそろ学校に行かなくてはならないから…」

そう言ってシユウは背を向けて歩きだす。

「そうか…さすがだよ。…ではこれを持っていてくれ。俺のバッチ
だ。新しいバッチが発行されるまではそれで我慢してくれ。」

とっさに行動する。

せっかく仲間になってくれたのに居場所が分からずお別れというのは避けたいからだ。

「わかった。ではまた会うことがあればその時まで。」

俺が差し出したバッチを受け取った彼はこう言った。

そこには何か意味深な内容が含まれているように思えたが俺には理解できなかった。

「そうか。では何かあり次第連絡するよ。あと、彼を代わりに倒してくれたことに関しては感謝してるよ。では…」

俺は感謝の気持ちを示し、奴を回収し撤退した。

プルルル…プルルル…

『もしもし…』

「おう！エリック！ついに第6グループの快進撃が始まるぞ！今か

ら帰還する！楽しみに待っていてくれ！」

『はっ、はっ、はっ、はっ……』

ブシッ……

誘拐と入隊

I n s i d e

いやぁ…昨日はひどい目に遭った…

何がって…あの後学校でからかわれまくって大変だったんだよ！

びしょぬれだったし、なんか中二病っぽいこと叫んでたらしいし…

目撃者意外とたくさんいたんだよ！

で、しかも帰り道に犬にめっちゃ追われるわ蹴っ飛ばしちゃうわっ
ていう事故も起きちゃったし…

あ、あくまでも事故だからね！勘違いしないでね！

まあ、そんなことはおいといて…

何処だよここ!?

なんとですね…気付いたら…何か裏組織のアジトみたいな黒光りしたカツコいい壁に囲まれてました!

…ん?何がカツコいいのかって?

…えっとね…

まずはこの色合い!

黒と紺の中間色くらいのメタリックな壁に点々と浮かび上がるブル
ーの小さな小さな強い光!パーフェクト!

次にこの、空間のちょうどいい広…

…あれ？何で俺はこんな危機的な状況でこの部屋について語ってんの？

『…はっ！？…ここ…ここは何処だ！？…しかもなんだ！？この色合いのカッコいい黒光りする壁に囲まれた…』

同じこと言ってるじゃねえ！この糞ジジイがああああ！！

『ぬ…糞ジジイだと！？いつ私がお前の親父になった！？？』

んなこと言ってるねえだろ！

あと寝起きなんだったらボケるな！

それに、ジジイってのはお前の代名詞だぞ！

『ふむ…ついに私も英語の教科書に出てくるようになったか。I
H E S H E T H E Y J I D G E Y^{ジジー}だぜ！ちなみに私はいつで
も真面目だ！』

おお…新しい！…って、なにそれっぽいスペル使ってたよ！？

しかもそう言う意味で言ったわけじゃないからね！

『なぬっ！？じゃあどどういう意味で使った！？』

あっ…せっかくのノリツッコミを無視しやがったな！

『そんな下手糞なノリツッコミなんて反応するまでもないからな。
それで、どついう意味で言ったんだ？』

ああ、簡単に言えばお前がウザいってことだ。代名詞の方もボケる
なの方も！

『な…何だつて！…よくも言つて…』

おい！誰か来たから一旦黙っとけ。

『ぬぐうう…』

「すまない、少しついてきてくれないか？」

…この顔は…ニコラスさん？

うん、ニコラスさんだね。何してんのこんなところで？

っていうか何でこんなところに俺を連れてきてるの？

あといきなり現われてついてきてくれってどういこと？、礼儀ってものをわきまえなさい！

「…ニコラスか？」

「そつだ。とにかくまずついてきてくれ。」

…はあ！？

何様のつもりだよ!?

なに俺の質問めっちゃ軽く受け流した上に命令しちゃってんの!?

そんなに重要事項なわけ!?

やだよ!ついてかないよ!俺はそんなに易々と誘拐されるような人間じゃないからね!

スタスタスタ...

...って...ああ!先行かないで!こんなところに置いてかれちゃ話にならないから!

スタタタッ

うん、てなわけでもりあえずついてきました。

ガチャツ…ピピピピピピ…ピー…ガチャツ…

そしたら…お分りのとおりニコラスさんがなんか難しそうなことやり始めました。

ちなみに俺の体内時計では作業はおよそ15分くらい続いています。

ピピピピピピ…

ピーーー！

ガタンッ

あっ…終わった。…多分。

「よし、説明が不足していたことについてはすまないと思っている。そして、今解除したのが地球上の「ある部屋」へのキーロックだ。そこが何処だかは入ったのお楽しみだ。…で、この扉がその部屋への入り口だから、まずは入ろう。説明はそこでする。」

ガチャッ…

…あああ…入ってっちゃったよ…入るべきなのかな？

『そうだな、せ…』

うん、入るべきだよ。っていうか入ろう。入れなくなったらおしま
いだし…

『無視す…』

ガチャッ

さあ、ニコラスさんが言った『ある場所』とはどういうところなんだろうか？なんてことを考えながら山田秀はその部屋に…

『何一人でナレーションしてんだ？このナルシストが！』

うるさい糞ジジイは黙りましょう！

『ああ！？今うるさいって言ったか！？言っとくけどな、俺は一言もうるさくした覚えはないぞ！決して…』

うるさい！黙りなさい！

『カアア！もう頭に來たぞ！後で覚えとけよ！』

何するつもりだこの糞ジジイ！騒音糞ジジイ！

『大丈夫！死にはしないから。まあその代わりに明日以降2度と地に足を着くことは無いだろうけどな！』

いやいや！何が起きるんだよ！明日から俺は鳥になるんですか！？

『ふふふ…それは明日目覚めてからの楽しみさー！ではさーばー！』

おい！逃げるな！

…ま、まあいいや

では気を取り直して…オープン！

そこに広がっていたのは、真っ青な空に真っ白な雲、鮮やかな花に覆われた地面、そして向こうには何処までも続いてそつな綺麗な海…

ではなく、狭い見覚えのある小さな部屋。

なぜ見覚えがあるのでしょうか？

だって、同じ…

俺の部屋じゃん!?

なに勝手に人の部屋入っちゃってんの!?この人!?

不法侵入だよ!

「よづこぞ!...汚いこのユアルームに!」

...いやいや...

ストーーーーップ!

なに俺の部屋に勝手に入ったうえに汚いとか言っちゃってんの!?

あっ、もしかしてあれかな?

あの…俺の部屋だったって知らない設定のつもりなのかな？

でもさ…

ユアルームって言っちゃってるからね！

英語が苦手な俺でも聞き取れたからね！

ニコラス改めイヤミーさん、あなたつくづく最低な人間だと思うよ。
うん。

「では、説明させてもらう。しばらく何も説明できなかったことについては謝らせてもらうが仕方がなかったことなんだ。実は君の力を考慮して少々強めの麻酔薬を投与させてもらったんだが、急所に当たったのか思ったより長く眠ってしまったため、急ぐほかなくなくなってしまったんだ。…まあそういう話は置いて、本題に移ろう。昨日君は見事シケンヌを撃破して見せた。ああ、昨日の犬のことな。今まで撃退した例はあっても撃破した例はなかったんだ。それをもつてわが部隊への入隊は認められた。それどころか、功績が認められ、すでに二等兵の称号も与えられた。見事としか言いようのない状況だよ。そして、これが昨日言った所属バッチだ。大切に保管し

てくれ。」

「あ…どうも…」

…じゃねえよ…!!…ッ!!!…ごろ満載じゃねえか!?

まずなんだ?何勝手に麻醉銃なんて打ち込んでんだよ!?!しかもごくごく一般的な高校生に対してどういう考えに至れば強めっていう結論に至るんだよ!?!

それに!!何で俺の監視なんかしてんだよ!?!何で俺が犬殺っちゃったの知ってんだよ!?!しかもあれ事故だよ!!気づいたらなぜか溺れててむしろ助けようとしたほうだよ!!イヤミーさんのペットだなんて知らなかったからね!!

しかも何でそれで功績が認められるの!?!やっぱし嫌味!?!嫌味団体のなの!?!イヤミーさん率いるイヤミーズって感じなわけ!?!

…ふう…疲れた…

「おっと…昨日渡した俺の所属バッチを返してくれないか?」

…えーっと…ちょっと待てよ？確かあれは昨日…

うん、犬にあげちゃった！

だってあれ持ってる限り襲ってくる感じだったんだもん！

あいつに投げつけちゃったよ！！

「えーっと…あれは…」

「ははは…知ってるよ。昨日シケン又との戦闘で使用していたな。さすがに俺が回収しておいた。割と冗談通じない方なんだな」

悪かったね！！冗談通じなくて！！あいにくイヤミーさんの冗談なんかに対応してたら体力無くなっちゃうからね！！

「す…すまない…」

あれ？昨日の設定だったらこんな感じのしゃべり方でよかつたんだよね？…うん、大丈夫だよな？

「じゃあ説明の続きを…」

えっ！？まだ続くの！？結構さっきので疲れて…

「えっと、次はこの部屋についての説明かな？今回はこの部屋の力レンダー裏に隠し扉を設置させてもらった。今後はここから出入することができる。ちなみに暗証番号はes616だ。Eコア(e)討伐(『s』ubjugation)班第6グループ、所属時年齢16歳ということだから忘れたらそうやって導き出すといい。ここまで質問は？」

…質問だらけだよ！？何で隠し扉であんなところと接続できたわけ！？魔法ですか！？ハ　ー　ポ　ターですか！？

それに討伐班って何！？また俺に犬を殺せとでも！？

「いや…特に…」

「では続きを…」

まだあんのかよー！

「ようこそ！よく来たな！Eコアのユーザールームに！」

未だ状況を把握しきれていなさそうな少年にサプライズ気味に話しかける。

少年は少々驚いた顔をして佇んでいる。

それもそのはず。

今回初めての学生隊員ということで、最新技術を駆使した新型のユーザールームを用意したからだ。

どういふことかと言うと…会議により『隊員だからといって学校を休むなんてことをさせるわけにはいかない』という見解に至ったため、当人の部屋から直接こっちにアクセス出来るようにしたのだ。

つまり、さすがのシユウでも見たことのない技術を利用したのだ！

「……………」

やはり強さ故の所以なのだろうか、やけに無言が多い。

それに常に周囲に敵の気配を感じているかのように鋭い目をしている。

『…ジ…聞こえるか？…ジ…エリックだ。一方的だがこっちから連絡事項を言っぞ。というか、そっちは俺と会話出来る状況ではないだろう。…まあ言いたいことは1つだけだ。早いうちに説明を済ませろ。あと、彼の行動を少し観察してみたのだがどうも怒りっぽい面があるようだから刺激をしすぎないようにしろ。』

…そ、そうだな…早いところ説明を済ませないとな

」では、説明させてもらっ。…」

急ぎ俺は説明を開始した。

まずは説明をしないまま連れてきてしまったことに対する謝罪、次に試験犬との戦闘試験の結果、称号授与に関する報告、部屋暗証番号の確認をした。

さらには、売店の料金は各コアが負担してくれるから無料であるということ、武器を所持したまま一般人と接触することは避けるなどといった説明を一気に終わらせた。

「まあ大体言いたいことはこれぐらいだ。何かあったらさっき教えた方法で俺に連絡してくれ。ではまた後日!」

ビビビビビ...

ガチャツ...

...

...

「エリック。今終わった。これからそっちに向かう。例の件に関する報告を頼むぞ。」

「あ
あ」

友情と悲劇

I n s i d e

「…まあ大体言いたいことはこれぐらいだ。何かあったらさっさき教えてた方法で俺に連絡してくれ。ではまた後日！」

スタタタタ…

………

いやあ〜！長かった！びっくりするくらい長かった！

数時間に渡る長い長い講義がやっと終わったよ！実際10分くらいだけど…

えっ？内容？

うんとね…わかんない！

だってコアだの所属だのチームだのっているいろいろ言っただけど何一つ俺の頭のなかでは合致してないんだもん！

理解できてないよ！

だって俺まだ高校生だし！

あっ…でも一つわかったことはあるよ！

それは…

なんかやばいことに巻き込まれちゃった！

あのイヤミーズって団体絶対やばいよ！多分そのうち「そんな素晴らしい政治家は金に溺れて死んじまえ！」とかの類の嫌味叫びながら首相とか暗殺しに行っちゃうよ！

『リアルに言いそうなこと言つなポケエ！どうせならもっと面白そうなこと言いながら死ね！』

いやいや！まだ死なんよ！

何勝手に殺しちゃってんの！？

それに何で面白いこと言つて死ななきゃいけないんだよ！

『じゃあ…「ふん！お前が俺を殺すことなど不可…ぐわあああ！」っていう死に方してもいいのか！？』

いや！やだよ！何かツッコけといてやられてんの！？

『だろ！じゃあ今から面白いこと考えとけ！』

そうだな…じゃあ…って！だから死なないって言ってんだろ！

『相変わらず雑なノリツッコミだな』

う…うるさい！

『ぶん、私のノリツッコミの方が…』

ガタガタッ！

ん？

「秀！緊急任務だ！急いで支度を！」

はあああああ！？

Outside

「これが彼、シユウに関する情報のすべてだ。もっとも、俺の情報網では限界があるんだけどな……」

そういつてエリックは資料を渡してきた。資料と言っても、A4用紙が埋まり切らない程度の量しかないが……

ちなみに、なぜ彼にシユウの情報収集を依頼していたかという点、一体過去に何をしてあの戦闘力、判断力を身につけたのかを知りたかったからである。

「まあ……とにかくわかったことは、彼が完全な未所属であったこと、また特別な訓練を行った記録はないという程度だが、ざっと目を通しておいてくれ……」

…驚いた。ニコラスが今言ったように彼、シユウは特殊な戦闘訓練を行わずあの戦闘能力を身につけていたのだ。

「わかった。ありがとう。そういえば新しい任務は来ていないのか？」

「残念ながら…」

「そうか…まあ第6グループだからな…」

カツッ…カツッ…

ガチャッ…

「調子はどうだ？エリック君、ニコラス君？」

物静かな足音とともに入ってきた男性は、入るや否やそう言った。

そこに立っていたのは白い髭を生やした男性、ヤマダシンジ山田紳志である。

「任務か？」

「ははは……ニコラス君、君はいつも気が早いな。まあ間違っではないのだが。」

そう、彼は主に任務を各グループに売る（というところ少し変だが、仲介金をとるという点で間違っではない）のを仕事としているため、彼が来たということは新しい任務がもらえることを意味するのだ。

「で、新しい任務は？」

「やや緊急任務だ。依頼主は防衛大臣、ロシアスパイの捕虜、報酬340万だ。ちなみに仲介金は8000な。」

「わかった。詳細を。」

「いいだろう。まずエリック君に位置情報を送信する。
…よし、あと20秒もすれば届くだろう。
そのままニコラス君にも送信してくれ。」

それで、対象は先ほど言ったようにロシアスパイ。ただ今回に限っては非常に重要な情報を握ってるため最悪の場合撃破も許可する」

ピピピピピピ…受信完了

「おう、届いたみたいだな。」

「…これ…あの…？どうして…？」

平生に反しエリックが大声をあげる。

それもそのはず、今回の任務の対象となった人物は…

「…気付いてしまったか…そう今回の討伐対象は『アカツキ』。討伐班第6部隊所属の狙撃要員だ。」

あまりの衝撃に言葉を失う。

つまり…身内どうして殺り合つたということになる。

その事実にはエリックも俺も言うべき言葉が見つからなかったのだ。

……

……

「彼は…アカツキはまだうちらにはバレてないつもりなんだな……」

長い沈黙を破ったのはエリックだった。

そんなエリックの問いに対して山田は答える

「ああ。今は自由行動中だ。向こうはこちらの状況など知らないだろう。」

彼はその目に「殺るのは今しかない」というメッセージを浮かべながら無言の圧力をかけてくる。

「…他のメンバーには何ていうんだ？」

今回は俺の問いかけ。もし俺ら2人が任務を承諾したとしても、他のメンバーをミッション要員に入れば間違いなく反対するものも出てくる。そうなるならミッションは俺ら2人、またはアカツキと友好の無いシュウを含めた3人ということになる。

その場合、突然行方を眩ましたアカツキについて他のメンバーになんと説明するのか？という意味である。

そんな俺の問いに対しても彼は躊躇なく答える

「死んだことにする」

2度目の衝撃、言葉を失う。

おそらく任務に失敗したため殉職したとでも言っのたろう…

何故この男はこんなに残酷なことをこんなに躊躇なく言えるのたろうか…

またしても長い沈黙。

エリックはパソコンに映るリーダーを真つ青な顔で眺めている。

「エリック…お前は狙撃要員だ。俺がシユウを紹介するという名目でアカツキを人目のつかないところに誘導するからお前はそこで麻酔銃を打ち込んでくれ…」

「おい！ニコラ…」

「リーダー命令だ！俺だって本当はこんなこと…」

「わ、わかった…じゃあ準備をしてくる…」

カツツ…カツツ…

「では、仲介金はコア資産から差し引いておく。報酬金はリーダーミッションを成功させたという名目で入れておく。それでは…健闘

を祈る。」

カッッ…カッッ…

すまない…アカツキ…

I n s i d e

さて、あの後危険を察知した俺は走って逃げだしたわけですよ。

そしたらさ…誰かにぶつかっちゃったんだけど…

『お…おい…逃げるべきなのではないのか?』

お、俺だって逃げたいよ！

『じ、じゃあさっさと逃げろ！こんなやつ目の前に立ってたらそのうち殺されちゃうぞ！』

いや、足が動かねんだ！

アンタが制御してるんだろ！

『そそそ…そんなわけはないか！むしろさっさと逃げたいわ
ドアホ！はやく逃げろ！』

だ・か・ら！足が動かねんだよ！

こんなFFのセフ　ロスみたいな奴に睨まれたら誰だって動けなくなるに決まってるんだろ！

「おい…」

『…おい！話し掛けてきたぞ！なんか答える！とりあえず謝れ！とにかく逃げる方法を…』

うるせえ！だまれ！今どうにかなる方法を考えてんだから！

「おい…」

どおすんだよ！無視っちゃったじゃん！アンタがうるさいからだよ！

「は…はい…」

「死にてえか？」

『やっぱりだ！逃げろよ！早く逃げろ！』

お：お前に従うわけじゃないからな！俺は自分の命が惜しいから逃げるんだからな！

撤々退々！

スタタタタ！

「っ…：テメエ！」

やばい！追ってきたよ！

しかも結構足速いじゃん！

そ、そうだ！アンタの力で足速く出来ないの！？

『出来るぞ！多分！』

マジでか！？助かる！

と、とにかくやってみろ！失敗しても良いから！

『任せろ！よし、行くぞ〜！とりゃあ〜！』

グギイイイ！

ギゃあああああ！

『どづした！何止まってんだよ！早く走れ！もっと走れ！』

いや！足気分的に軽くなったけど腕が物理的にとんでもなく重くな
ったぞ！

『だ、大丈夫だきつと！…っ！前に犬いんぞ！ジャンプだジャンプ！そのうちにもう一回どうにかする！』

わ、わかった！

って犬！？も、もしかしてシケンヌ！？…いや違うよな！？

と、とにかく飛べば良いんだな！？大丈夫なんだな！？

『大丈夫だ！私を信じなさい！』

うっ…信用できん…

ま、まあいい…よおし…

とじゅああ…

くるん

グキッ！ドカン！ズテン！

ぐあああああ！肩の関節があああああ！

『よし、OKだ！』

どこがだああああ！

腕が地面についてたせいで腕支点の回転運動したんだぞ！

逆立ちミスって後ろにこけた人の肩やっちゃった版だよ！

肩240度は回ったぞ！

『大丈夫。痛い痛い飛んでけ』

黙れこの糞ジジイ！

よく考えればさっきから黙って従ってれば…

『そんなこと言ってる間にさっさと逃げろ！』

そ、そうだった！急がないと！

…っ…あれ？

セフ ロス死んでる！

なんで？俺なんかしたの？

…なんもしてねえよ！ただただ逃げただけだよ！

『おい…そろそろニコラス来るんじゃないのか？』

…へ？

…そつだよ！この状況をあのイヤミーさんが見逃すはず無いもん！

『隠せ！』

無理に決まってるだろ！そんなことやったらリアルな逮捕だよ！

『じゃ、じゃあさ！逆にあいつのせいにしちゃえば！？』

そ、そっか！その手があったか！

いや待てよ…こいつに従ってよかったと思っただことあったか？

…ねえよ！絶対従っちゃ駄目だろ！

『お前！何を言っている！今回に関してはお前も共感したじゃないか！』

…そ、そうだな…確かに今回は筋が通ってるし…

『今回だけは従いなさ…』

「はあ…はあ…秀！間に合ってよかった…暁のことだ、もし遅れてたらお前のことを殺していたかも…」

き、来やがった〜！！イヤミーさん来やがったよ〜！！

しかも何！？知り合い！？絶対嫌味言ってくるじゃん！！

「う…うう…はっ！！ニコラス！！頼む！！こいつを…」

「すまない…暁…」

バンツ！

…はい？

撃ったよこの人！！友人撃ったよ！！

こんな昼間から目の前で撃ったよ！！

セフ ロス死んじやったよ！！きつと！

「さすがだ秀！前回に続いて暁までも一撃で仕留めるなんて！」

いやいや！違つよ！仕留めたの完全にアンタじゃん！今回はかりは
言い訳できないよ！

「仕留めたのは君ではないか。俺は何もしていないぞ。」

「いや、そんなことはない。君の一撃は十分なダメージを蓄積させている。俺は最後に一発撃ち込んだだけだ……」

だ・か・ら！！！それを『仕留めた』っていつの！！むしろアంత
の方がダメージ与えてんじゃない！！！！

「……彼はどつするんだ？」

「そこは任せとけ。仲間の最期くらい……」

「『自分たちで見届ける』だろ？（キラーン）」

……

ナルシストなやつ来た〜！！！！

何こいつら！？なんで昼間から全然カッコよくないこと糞真面目に
やれんの！？？

「エリック！…どうしたんだ！？」

…あつ…エリックっていうのね？…このナルシさん…

「どうしたも何も、気づいたら出発してたから急いで追ってきたんだ。…で、暁はもう…」

「ああ…残念だが…グスツ…」

「そ、そうか……で、でもさ！回収だけは俺らでやるっぜ！最期くらい…うう…グスツ…」

ええええええええええええ！？

何泣いてんの！？殺したのイヤミーさんじゃん！俺じゃないよ！多分このまま行くと俺のせいになるかもしれないけど俺じゃないからね！！

「秀…よくやつてくれたよ…グスツ…すまないが俺らだけにしてくれないか？まだ気持ちの整理がつかないんだ…」

いやー！待てええええい！！！！

何！？あれだけ躊躇なく殺しといて『気持ちの整理がついてない』
ってどづいづことよ！？？

セフ ロスさんが立ってから撃つまでの時間1秒もなかったよ！！

しかもやっぱり俺が悪者か！？ははは…さすがイヤミーさんだよ…

「そうか…では失礼することにしよう…邪魔してすまない…」

なんで俺が謝ってんだろ？

…ま、まあいいや…とにかくもう二度とあの人達に会わないように
しないと…

「あっ！待ってくれ！明日午後6時から集会があるから忘れないでくれ。その時に君を紹介する。」

「そ…そうですか…わかりました…では…」

カツツ…カツツ…

何でこうなるんだよおおお…！！！！！！

悲劇と困惑

Outside

くるん…ドカッ！

「ぐはっ…」

…一瞬の出来事だった。

まさに俺がシュウに追いつこうとしたとき、シュウは逃げるかのよう
にアカツキに背を向けて走り出した…と思いきや突然腕を後ろに
つき、ばく転のような回転運動、そしてそのままアカツキの頭に渾
身の一撃を放ったのだ。

無論その不意の一撃を喰らったアカツキはそのまま倒れてしまった。

…それにしても訓練なしにどうしてあれほど正確で強力な一撃を放
てるのだろうか？

まあ、そのような疑問が浮かぶものの棚に上げることにする。というのは、運の悪いことに相手はアカツキ…戦闘を続ければ危険を伴うのは必須なのだ。

「はあ…はあ…シュウ！間に合ってよかった…アカツキのことだ、もし遅れてたらお前のことを殺していたかも…」

…そう…アカツキは狙撃要員であるものの肉弾訓練も十分に行っており、総合的には第1、2グループにも劣らない戦力を備えている。それを踏まえればさすがのシュウといえども確実に勝利できるとは言えないどころか、むしろ負けてしまう可能性が高いのだ。

「……………」

…やはり無言…そして鋭い表情…前回から推測すれば、未だ戦闘が終わってないということを示しているのではないかという仮説を立てる。

そしてその仮説は次の瞬間見事に立証される。

「う…う…」

…なるほど…やっぱりだ…当然のことながら彼、シユウは戦闘が終わるまで一切気を抜かないのだ…

それに比べ俺は…

「はっ…ニコラス…頼む…こいつを…」

起き上がりながらアカツキは俺を見ながら非常に小さな声で言う。

アカツキ…そんな目で俺を見ないでくれ…そんな目で見られたら…

俺は麻醉銃に手をかける…

『守ってやってくれ…』

…っ！？…今…なんて…

守ってやってくれ…確かに彼の口はこう動いた…

…そんな…まさか…

彼がもう一度口を開く…

□

「すまない…アカツキ…」

バンツ…

…その先を聞きたくないがための判断か、俺は反射的に引き金を引いてしまった…

静かなその場所に鳴り響く銃声…サイレンサーを装備しているにも関わらずその音は俺の耳に大きく反響し続ける…

急所には当たらなかつたもののシュウの一撃で十分なダメージを負っているアカツキにはしっかり効果を発揮してくれたのか、彼は無抵抗に倒れてしまった…

アカツキ…

何度も頭をこの名前がこだまする…アカツキ…どうして…

後悔の念と疑問が頭を支配する。

しかし、シユウに対して放った言葉はそれを感じさせるようなものではなかった。

「さすがだシユウ！前回に続いてアカツキまでも一撃で仕留めるなんて！」

…俺とアカツキがどれほど仲が好かろうが、どれだけ心が通じ合っ
ていようが…シユウには関係ない。

シユウは…ただ任務を遂行しただけなのだ…彼にこの悲しみを感じ
させてはいけない…そう思った末の発言である

「仕留めたのは君ではないか。俺は何もしていないぞ。」

…シユウ…気を使ってくれるのはありがたいが…結構精神的に来て
いるんだぞ…それ…

「いや、そんなことはない。君の一撃は十分なダメージを蓄積させている。俺は最後に一発撃ち込んだだけだ…」

…現実逃避だよな…笑うなら笑ってもかまわない…だから…そんな怒りの目で俺を見ないでくれ…

「…彼はどうするんだ？」

しばらくの沈黙の後、彼はそれだけ言い放った。

どうする…つまり本当に組織に差し出すのか？という意味だろうか。

無論、そんなことは避けたい。…だがこれも運命さだめ、組織の一員になった以上避けることのできない苦痛でもある。

…さすがにシユウもそれくらいわかっているのだろう…となれば、そういう意味だとは思えない。

だとすれば先ほどの言葉の意味…あくまでも推測にすぎないのだが、おそらく『始末は任せた方がいいのか?』という意味なのではないかと思う。

それならば…せめてもの償いとして俺がやらせてもらおうとしようか…

「そこは任せとけ…仲間の最期くらい」

「『自分たちで見届ける』だろ?」

…っ!?! エリック!?! なぜここに!?!

そっ…そこに立っていたのはまぎれもなくエリックだった。

「エリック!?! どうしたんだ!?!」

「どうしたも何も、気づいたら出発してたから急いで追ってきたんだ。…で、アカツキはもう…」

…それはそうだろうな… エリックに狙撃を命じたのは俺なのに…

そしてアカツキ… 麻酔銃はしっかり効いただろうから… 当分目は覚めないだろう… 少なくとも俺らの前では…

「ああ… 残念だが… グスツ…」

うう… 人前で涙を流したのは何年ぶりだろうか…

「そ、そうか… ・・・で、でもさ！回収だけは俺らでやるっぜ！最期くらい… うう… グスツ…」

… エリック… お前もか…

でも…

せめて…せめてシユウの前では…

シユウは…関係ないんだ…

「シユウ…よくやってくれたよ…グスツ…すまないが俺らだけにしてくれないか？まだ気持ちの整理がつかないんだ…」

…こんなことしか言えない俺を許してくれ…そしてこんな俺の気持ちを汲んでくれ…

「そうか…では失礼することによつ…邪魔してすまない…」

…すまない…本当にすまない…

何も言わず彼は去っていく。

その後ろ姿に優しくも強い心を感じたのはエリックも同じだろう。

「あっ！待ってくれ！明日午後6時から集会があるから忘れないでくれ。その時に君を紹介する。」

「そ…そうですね…わかりました…では…」

シユウは振り向き、未だ怒りの表情を浮かべつつそう言い、また足早に立ち去った。

ありがとう…シユウ…

……

……

「ニコラス…これで…これで…よかったんだよね？」

しばらくすると泣き声まじりのエリックが言った。

…そんなこと…よくないに決まってるだろ…！

そう言いたくなる。…しかし俺もチームを率いる存在…妥協は許されない。

「ああ…仕方ないさ…」

「…そうか」

エリックはそれだけ言って作業に戻った。

その後は二人とも何も話さなかった…その場に聞こえるのは二人のすすり泣く声とアカツキを回収する音のみ…

.....

.....

『守ってやってくれ』

さっきの言葉が頭をよぎる。

アカツキ……いまさらだが……何でお前を殺そうとした彼を『守ってや
ってくれ』なんて……

「……わかってるだろ？彼は大物になる。間違いなくだ……」

「ア……アカツキ！？……なぜ！？」

な…なんということだろうか！？…アカツキが…目を覚ました…

「ふん…こつなることはわかっていたさ…今まで…ありがとな…」

小声ながら彼の声は確かに俺のもとへ届く。

無論エリックのもとにも届いているのだろう…

「な…何言ってるんだ！？別にお前を…」

「ニコラス！！」

エリックが言葉をさえぎる。

「…エリック…それでいい…リーダーが判断を誤った時は…お前が正してやるんだ…」

…アカツキ…どうしてそんなことを言えるんだ？裏切った仲間に対してどうしてそんなことを言えるんだ？

聞いたかった。問わないといけない気がした。

でも俺の口から発せられた言葉は違った

「すまない！！本当にすまない！！」

「…言うな…むしろお前らを騙していた俺の方が悪い…おっと…そろそろ麻酔が効いてきたみたいだ…もう会うことはないかもしれないが…元気でやれよ…」

そついいながら俺の腰に手を伸ばす…

「…アカツキ…」

パン！！

…アカ…ツ…キ？

「な…何してるんだよ！！アカツキ！！それは…麻醉銃なんかじゃ…」

「わかってる…自分の尻は自分で拭くさ…じゃあな…」

「アカツキ！！！！」

午後6時…緊急集会を開始した。

「突然集めてしまつてすまない…実は話さなくてはならないことがあるんだ…全員集まつているよな？」

全体を見渡す。人数は17人。数か月前と同じである。

そして確かにそこにはシュウの姿もある。

「ニコラス…アカツキがいないが？」

狙撃要員ステイブが言う。アカツキとペアを組んでいた若手隊員だ。

アカツキとはとても仲が良かったのは言うまでもないだろう。

「あ…構わない。その件に関しては後で詳しく話す。」

多少ざわめく。

…しかし数秒と経たぬうちに再度静まり返る。

「では…今日集まってもらったのはほかでもない…もう知ってるものもいるとは思うが、新たな優秀な人材が入隊した！なんと入隊試験を撃破合格しての入隊だ！」

全体がどよめく。

そしてその視線はすぐにシュウのもとへ集まった。

「それと…」

視線が一瞬にして自分のもとへ戻ってくる。

「……………」

口が発言を拒む。

皮肉なことに何も知らない隊員は俺の口から発せられるであろう言

葉を心待ちにしている…

「アカツキが…死んだ」

I n s i d e

なんでこんなところに来ちゃったんだろうね…ははは…

『まあ、自業自得ってやつだな！お前が「わかりました」なんて答えたもんだから！ハッハッハ！』

だってあんな状況だよ！変な事言ったら完全に死亡フラグ立ってたからね！

…でさ…なんか…みんな俺の事見てない？

嫌なんだけど…こつこつという状況…

『そんな事あるはずがないだろ！このナルシストが！自意識過剰少年が！』

はあ！？

じゃあ見てみるよ！みんな俺の事…

…見てねえええええ！！！！

なんで！？さっきまで完全に見てたじゃん！！注目の的だったじゃん！！！！

『はいはい…みっともないからやめなさい。それだから自意識過剰ナルシスト少年って呼ばれるんだよ。』

くうう！！腹立つ！！

いや、さっきまでは本当に見られてたんだからね！

それに自意識過剰ナルシストなんちゃらなんて一回も呼ばれたこと無いからね！

『だ・か・ら！みつともないからそこまでしなさい！どうせ嘘なんだろっし（ニヤニヤ）』

嘘じゃねえよ！本当にさっきまで完全に見られてたんだぞ！

『はいはい』

っ！！適当に流しやがって！！

……シーン……

なあ？なんでこんなに静かなんだ？ニコラスさん何か話してるんじや無かったの？

「…暁が…死んだ」

ジジャジャーン

ビクリ〜！！！！

じゃねえよ！

何言ってるんこの人？

殺ったのアンタじゃなかったっけ？

「そりゃあ…説明も必要だよな…まだ俺も気持ちの整理がついてないから簡単にしか言えないが説明するよ。
実は…結論から言っと…暁はスパイだったんだ…
それで、俺らにリーダーミッションで暁の捕虜が発注された。
受注したくなかったのは山々だが…もしかしたら暁を助けられる別の方法があると思って受注したんだ。
そしてすぐに暁と接触したんだが…『自分の尻は自分で拭くさ』ってだけ言って…グスッ…」

グスッ…グスッ…

うわあ…周りの人みんな泣いてるよ…

でもさ…ちょっと待とうか

あの…殺ったのアンタだよな？

犯行現場は俺の家周辺、殺害方法は拳銃でバン、目撃者俺。だよ！

何があつてそんな美談もどきになつたわけ？

「嘘だつ！アイツは…アイツはそんなやつじゃなかつた！」

おお！君正しいよ！イヤミーさんの言つてること嘘だからね！

後で名前覚えておくよ！

「ステイブ…俺だつてまだ認めたくないさ…でも…認めなくちゃ…グスツ…」

なんかイヤミーさんの演技すごくプロい気がするの俺だけかな？

「そう…だよな…何言つてんだる俺？…嘘だつたら殉職つて言うもんな…自分の名前なんて出さないもんな…普通…」

ステイブさんだっけ？

何見事に騙されちゃってるの!?

あなたの意見は合ってたんですよ!

そんな易々と騙されちゃ駄目ですよ!!!

「わかってくれたか…ありがとう…ではこれで解散する。こんな状況ですまないのだが、仕事はしっかり取り組んでほしい。
…あと、エリックと秀はこの後残ってくれ。
では解散だ。」

…お・呼・び・だ・し〜

ふざけんなああああ!!

『ほね。さっさと行きなさい。別に生きなくてもいいけど。』

へえ〜…なんかポケが雑になってきたみたいだね。

『なっ…なんだと！？今ボケた覚えはないぞ！』

はぁ！？何言ってるの！？

完全にボケて完全にすべってたじゃん！

今回ばかりは俺の勝ちだな！

『いや、負けじゃボケエ！財力、権力…そ、その他もろもろ全てお前には勝ってるぞ！』

そんなことないわ！

…っつーかなんですぐに浮かんだ2つが財力と権力なんだよ！卑しいぞこの糞ジジイ！

『い…卑しいだと！？…言っておくが私は猫だぞ！もっとも人間に心の豊かさを与えている動物だぞ！』

あっ…そういうばそういう設定もあつたな…

でもアンタおっさんだからな！何があつても猫には見えないからな！

それと！俺も猫は好きだけ…

「秀？どうしたんだ？」

…？

あっ…イヤミーさんじゃん…

…そっか…あれじゃん！お呼びだしじゃん！

「そついえば呼び出されていたな…すまない…」

「すまないのはこっちの方だ…昨日の秀に対する対応は本当に申し

訳ないとおもっている。…すまない」

ああ、あれね？…うんなかなかひどかったもん

ついでに嘘もひどかったもん！

「まあ、そこまで気にする事ではないと思うぞ。…それにしても随分な嘘をついたものだな。」

これは…嫌味には含まれないよね？

だって割とストレートに言ったもん！

イヤミーさんとは違うんですよ！

「…バレていたか…それにしても前回もそうだったがどうすればそんなに嘘を見抜けるんだ？」

えええ…

むしろもっがっかりだよ！

まずさ…あれでバレてないと思ってる地点で間違いだと思っつよ！

それにさ…なんでそんなこと聞くの！？

そんなの逆に気づかないはず無いじゃん！！

むしろこっちが聞きたいくらいだよ！

…まあそんなこと言わないけどね…どうせ嫌味言われるだけだもん。

「別に大したことではないだろう。用事というのはそれだけか？」

『いいえ』って答えないでよ！

俺の求めてる答えは『はい』だからね！さすがのイヤミーさんでも
空気くらい読めるよね！？

「いや…」

はい。帰ろう。

さすがイヤミーさんだよ。

本名『クウキ・ヨメナ・イヤミー』さんだよ！

「実は武器開発部からの依頼なんだが：今回新たに開発されたという武器を今後1ヶ月携帯していてくれないか？武器を一切所持していない君なら悪い条件ではないだろう。」

…は？

いや、俺あれだよ？高校生だよ？なんで武器なんか所持しなくちゃいけないの？

『武器』 武器』

子供かアンタは!？

『武器を所持できるなら大人だぞ!』

んなことねえよ!現にバリバリ現役の高校生が武器の所持を勧められてるんだぞ!

『ま、まあ!とりあえずもらっとけ!悪いもんじゃないだろ!』

いや!悪いもんだよ!形態によっては銃刀法違反になるからね!?

『じゃあいい...』

...ありゃ?意外と諦め早...

「いいだろう。ついでに武器の性能と威力、使用用途について教えてくれ。」

...っておい!!勝手に話すな!!!

それに何承諾してるんだよ!?

『だって欲しかったんだもん…』

あのさ…アンタおっさんなの自覚してないの！？おっさんが駄々こねてるどころ見て誰が喜ぶんだよ！？

『黙れ！！私のどこがおっさんなんだ！？私は…』

「助かるよ。…これがその武器だ。名称は『携帯足止め砲NE2000』あくまで護身用のだが、名前の通り敵を足止めできる網を2000cm飛ばすことができる携帯銃だ。ただ、試作品となっているように、緊急時の敵がどれだけの時間で脱出できるのかがシミュレーションでできなかったから、そこだけ注意してほしい。…まあ、説明はこんなもんだったと思うから、いざとなったら活用してくれ。」

「あ…どうも…」

「じゃあもう大丈夫だ。ありがとう。」

…よし、帰ろう。他に何か言われたらめんどくさいから。

…いいよな？おっさん？

『…なんだよこれ！？私はライフルみたいなのが欲しかったんだ！
！こんな変なのなんて…』

テメエが言ったんだろバカヤロー！！

『し、知らないな…なんだその武器は？』

…さて、帰ろうかな。

『無視すんなこの…』

「じゃあ…また会うことがあれば…」

…よし、早く逃げよう。

スタタタタッ…

「あっ！…ちょっと待ってくれ！…！」

げっ！？イヤミーさん！？めんどくね…

『そつだ！…！今こそあの武器を…』

あっ！…！そつか！…！

「とじちああああ…！…！」

バンツ！！

シュルシュルシュル！！

休息と訪問

O u t s i d e

ドゴンッ！

スタツ…

カチャツ…

…まさに俺がシュウに話し掛けた瞬間、低い粉碎音と共に降りてきたのは1人の女性だった。

そして、その女性は着地するやいなやライフル系統の武器を取出し俺に向けてきたのだ。

無論俺はすぐに回避行動に移る。

カチャツ…パンツ！

うぐっ…

…っ！？

ま、麻醉銃！？

意識が遠退く…

最後に目に映ったのは女の左手に握られた麻醉銃、右腕に抱えられたスナイパー、そして嘲笑うかのようなその口元……ロー…ザ！？

まさか…こんな最期を迎えるなんて…

いやあ…何とか逃げ切ったよ！

あれ以上イヤミーさんの相手してたら体力持たないからね！

…でさ…誰この人？

『山田氏』

えっ？アンタ知ってんのこの人？

『いや、知らん。私の優れた勘がそう言った。』

じゃあ言うなよ！一瞬イヤミーズ関係ない人かと思って安心しちゃ

つたじゃん！

『なんで関係ないって思ったんだ？』

ああ、だってイヤミーズの人たちみんな外国人っぽい名前だったじゃん。

ステイブさんだって見た目コテコテの日本人だったけどそんな名前だし。

『なるほど…馬鹿なりに考えたじゃないか。』

えっと…ここで怒ったらアンタの思いつきばだろっから怒らないことにするよ。

『ありゃ…本当に頭良くなってきたな。まあ私ほどではないけど。』

うん…スルーしてあげるよ。そっちもそっちで反応するの面倒でしょ。

『面倒じゃないわアホ！お前は怠け者か！？』

あのな…人間ってのは疲れると反応が悪くなる生物なんだよ。

おっさんも頭良いならそのうち気付くから心配するな。

『ふむふむ……つまらんな。じゃあとりあえず座って休んだらいいじゃないか？』

ああ。悪いけどとりあえず座らせてもらっよ。割と疲労溜まってるし…

…

すー…すー…

初めまして…と言った方が正しいだろう。

私は山田紳志。主に依頼の仲介人をして生活費を稼いでいる。

政府の超緊急任務を除けば基本最初に私に依頼が発注されるので、それを各グループの戦力に応じて振り分ける作業を引き替えにして報酬額と比例した仲介金を要求するという仕組みだ。

…だがしかし、今現在私はそのような作業をしていない。

なぜならば、新入りの秀という人物の力の秘訣を探り、それをレポートとして第6グループに提供しようかと考え彼の部屋に潜入したのだ。

無論、彼に感付かれてもいけないので『裸眼ステルス』と呼ばれる、特殊訓練を受けないかぎりは裸眼で目撃出来ないというステルスを利用させてもらった。

ガチャ…

予想よりも6分早い帰宅。…大して注視すべきではないだろう。

…それにしてもどうしてこのような『荒地』と表現しても違和感の感じないようなこの部屋から彼のような逸材が育っていったのだろうか？

まあいいだろう。とりあえず彼の観察を…っと！驚いた！ステルスが見抜かれたのかと思ってしまったではないか…

そう。何を以てか、彼は一瞬その鋭い眼差しで私を睨んだかのように感じさせる動作をしたのである。

とはいえ、私もプロ。簡単に見抜かれるはずもないし、動作に反応して物音を立てるなどという失態はしない。

…すー…すー…

…これまた驚いた。彼は座るやいなや5秒と経たぬうちにノンレム睡眠、つまり夢を見ていない睡眠に入ったのだ。

これは彼の目玉が動いていないことから立証される。

ちなみに、この眠りにすぐ入れることは迅速な体力回復を期待できる反面、その日脳に入ってきた情報の処理を行えないというデメリットがあるために国家機密組織では『自己判断』と制限出来ないでいたのである。

…ふむ。そう考えていたら私も疲れていたみたいだな。

まあ、ずっと立って腕を組んでいただけなのだがこれまたなかなか足への負担が大きい。

…ちよつとここに腰を掛けさせていただくことにしよう。

… 一体何分で起きるのだろうか？

「うん…」

おっ！起きたみたいだな。

時間は… 43分、まあ別に大した記録ではなさそうだな。

ギロツ！

ビクッ！

くっ… 秀君… さすがだな…

…どういう事かというところ、彼が眠っている間に部屋の隅に小型監視カメラを設置させてもらったのだが、その位置が丁度秀君と私を結んだ直線の延長線上なのだ。

…しょうがない…回収させていただきます。

立ち上がり、回収作業をする。

私程ともなれば移動くらい物音一つ立てずできるわけなのでこれが原因で気付かれることはそうそう無いだろう。

…作業を終える。

不意に秀君の方を振り向く。

未だにこちらを睨んでいるように思える。

もとの位置に戻りまた腕を組んで立つ。

…今現在ですでに十分な調査結果を提示できるだろう。
しかし、彼はこれだけではないはずだ。

そう思うと帰るに帰れないのは誰もが納得してくれらることだろう。

…にしても、よくこの荒れた部屋からこの小さな監視カメラを発見
できたな。とつくづく感心する。

……

……

「なあ、おじさん？」

…っ!?

I n s i d e

ふわあゝ

結構寝たなゝ

…ん?なんか忘れてるような…

『山田氏の事じゃないのか?』

あああああ!

完全に忘れてた!!

怒ってるかな？

…チラッ…

「……………」

く・つ・ろ・い・でる〜!!!

何勝手に人の部屋でくつろいじゃってんの!?

ああ…もしかしてあれ？ホームステイってやつ!?

いやいや!違うよ!こんなの受け入れてないよ!ノット・アクセス

トだよ！

……ジー……

注意……睨み付けてます。はい。

キヨロ……

……アンタだよバカヤロー！

何？後ろに何かいるとでも思った！？後ろ振り向いたところで誰もいないからね！！何も無いからね！！

スタスタ……

だ・か・ら！何も無いって言ってんじゃん！！なんで部屋の隅を調べてんだよ！？

何！？部屋の隅になんかあるの！？無いでしょ！？何もないんだよ！！

とじとじ...

あっ...戻ってきた...

.....

キョロキョロ...

…だからああああああ！

何もないの！！

見渡したところで何もないの！！

っつーか何！？勝手に人の部屋上がったって腕組んで偉そうにしゃがって何様のつもりだよ！？

あ…わかった。アンタあれでしょ？イヤミーズの一員でしょ？

どーせ『よくこの汚い部屋でここまで育ったな』とかの類の嫌味言ってくるんでしょ？わかってるよ！それぐらい！！

ああああ！そう思うとイライラしてきた！ちょっとガツンと言ってやらなきゃいけない！

「なあ…おじさん」

「……………」

…無視しやがったあああああ！！！

完全に振り向いたくせに無視しやがった！！

ああ！もう堪忍袋の緒が切れたよ！！もう初対面とか関係ないからな！全部アンタのせいだから！！

「おい！その糞ジジイ！黙ってないで何か言ったらどうだ！？」

「な…何っ！？見えていたのか！？」

はあああああああ！？

いやいや！見えてるに決まってるじゃん！？

何をどう考えればそれで身を潜められるって思えるわけ！？

最初から最後まで常に見えてたよ！！

「見えているに決まってるだろ！？つーか誰だよ！？」

「さすがは二等兵の称号を与えられただけあるな。私は山田紳志。ニコラス君の友達と言った方が分かりやすいかな？」

やっぱりだ〜！

やっぱりイヤミーズの一員だったんだ？

で、何？山田ってマジなの！？おっさんの優れた勘当たってるの！？

『ま、まあ…私ほどの優れた勘をもってすればこれくらい簡単だし！う…嘘じゃないぞ！』

いや、絶対まぐれで当たっただけでしょ。アンタわかりやすいよ。

『そそそ、そんなことはないぞ！…ほ、ほら！何か話し掛けようとしてるぞ！山田氏が！』

「実はいかにして君がそれほどまでに成長出来たのかを調査しててな。ほら、このまま行くと君がチームを引っ張る存在になりかねない。でも、小さい頃から仲の良かったニコラス君やエリック君達には頑張っしてほしいからね。そのために君が普段行っているトレーニングなどを彼らに参考にしたい。欲しかったってわけだ。…それで早速ですまないんだが、どうしてもわからないことがあったんだ。…この部屋の家具や道具の配置には意味はあるのか？」

…うん、一つ一つ処理していきますか…

まず大前提！俺はただの高校生だよ！二等兵だの言ってるけど何もしてないからね！！

それに！なんで俺がイヤミーズを率いる存在にならなくちゃいけないわけ！？

やだよ！あの人達と一緒にいる地点で体力無くなってるんだよ！

それにさ！『なりかねない』って何！？なっっちゃいけないわけ！？
…別になりたくないけどさ！…

しかもなんで目の前で俺を否定したの！？何故に無理矢理二等兵とかに仕立てあげて『君よりイヤミーさんの方がいい』みたいな事言ってるの！？

さすがに嫌気はさすよ！！

あと！俺はトレーニングなんかしてない！！ゲームの技術に関してはトレーニングしてるかもしれないけどアンタが言ってるようなトレーニングは絶対にしてないよ！！

そんでさ！これ一番重要！！

やっぱり嫌味言いに来たのかアンタは！？

『部屋の家具や道具の配置』？…そんな丁寧に嫌味言われちゃたま
んないよこっちは！！

結局は汚いってこと言いたいんでしょ！？

わかってますよ！！だってさっき予想したばかりだもん！！

俺の勘もなかなか優れてるからね！！

ただ嫌味言いに来たなら帰ってくれ！！

…ふう…全力のツツコミお疲れ様ですって自分に言いたい気分にな
ってきたよ。ハハハ…

「別に意味などない。むしろ意味が欲しいくらいだ…」

あれ？今の言葉なんか意味深でかつこよくない？

いやあ…ただただ怒ってる人好きじゃないからね。内心そう思っ
てもクールに喋れる人の方がいいじゃん！

そういう人をつっこいいて言うんだよ！

『やっぱりナルシストではないか。本性を出しおったか！』

違う！他の人が言っていたらつっこいじゃん？そういう言葉を俺は
つっこいいて言ってるの！！

『なんか上手く話が噛み合っていない気がするんだが？』

う、うるさい！

「そうか。ではそろそろ仕事もあるから去ることにするよ。邪魔してすまなかったね。」

ジュジュジュ…シュツ…

……………帰って来た……みたいだな？……なんか劇的な方法で…

でも結局や…

何しに来たんだテメエはよおおおおおおお!!!

搬送と記憶

Another side

ジュジュジュ…シュッ…

…ふう。瞬間移動というのなかなか負担がでかいものだな…

なかなか腰にくる…

で、秀君の部屋に潜入させてもらったわけなのだが…結局わかったことは3つだけ…それも圧倒的なものや意味深長なものだけ…

1つは彼が並外れた注意力を持っていること。

次に彼の睡眠法が特殊であること。…これらの2つは彼の圧倒的な能力差を見せ付けるようなもの…

最後に部屋の家具や道具の配置には現在何ら意味はなく、意味を持たせる方法を模索しているということ。…意味深長すぎて私には理解できなかつた…

うーん…これを提示したところでニコラス君は何が出来ののだろうか？

いや、とりあえず渡しておくか…彼なりに何か見つけられるかもしれない。

ガチャツ…

「あつ…山田さん…」

着いて早々話し掛けてきたのは暗い雰囲気放っているエリック君だった。

エリック君だけじゃない、他の人達もみんな暗い雰囲気を持っている。

「何かあったのか？」

「はい…実はリーダーが…撃たれました…」

…っ!?

最大級の衝撃。私は彼らに任務を託していないし、臨時任務があるなら掲示されるはずである。

つまりは…内部による犯行なのか!?

「ど、どつして!?!…何があったというのだ!?!」

「あつちを見てください…」

天井を見る。そこには大きな穴が開いている。

「実はあの天井から……って！山田さん！？どこに行くんですか！？」

…気付いたときにはもう遅かった。

彼が話している最中だというのに私の足は医務室の方へと駆け出していた…

Outside

（～記憶～）

あれはいつだったか？

俺と綾香は幼馴染みで小さい頃はよく遊んでいたな…

小学校も中学校も高校も、常に同じクラスで驚かされた記憶もある。

周りには冷やかされもしたが笑って受け流してたな…

今から考えれば愉快だったよ。その頃は…

だって…まさかその時は2人とともに（国家機密組織）に所属することになるなんて思ってもいなかったからな…

6年近く前、近所に住んでいる山田さんからこの事を聞いた。

本当にそんなものが存在するのかと疑って止まない俺をここに連れてきたのも確か山田さんだったと思う。

仕事が決まっておらず、大学受験すらも失敗した俺はすぐに入隊を
決断。トレーニングに参加させてもらった。

ちなみに綾香は大学に受かっていたのでここには来るはずはないと
確信していた。

…まあ実を言うと綾香と一緒にいられないって思った時俺実はすこ
く切なくなっただ…

それにこの職業だ。いつ命を落とすか分からない。

もう二度と会えなくなると思うとなおさらだ。

…でもそんな俺に衝撃の知らせが入った。

俺が戦闘訓練を行っていた時だったと思う…

『藤咲綾香です。トレーニングよろしくお願いします。』

トレーニングルームの隅、監督のいる場所から聞こえた声、内容…
綾香がトレーニングに参加するということだった。

『あれ？ 晃じゃない！？ 何してんの？ こんなところで！？』

『なんでこんなところに来た！？ 大学はどうした！？ 綾香はこんなところにいるべき人間じゃないんだぞ！！ さっさと帰れ！！』

突然話し掛けてきた彼女に言い捨てた文句、その時の彼女の悲しそうな顔。それらは二度と忘れることができないほど脳裏に焼き付いた。

『なんですって…』

悲しそうな顔をした彼女はこれだけ言い残しその場を去る。

自分に素直になれない俺に嫌気が差した。

それから二度と綾香を見ることはなかった。

安堵と寂寞の溜息を吐く。

…これで良かったんだ。

そう信じて1ヶ月近くトレーニングを続けた。

トレーニングの全課程を終えた俺は入隊試験を行った。

無論苦戦はしたが失敗するような難易度ではなく、当然のように合格した。

その時に所属した先が討伐班第6グループだ。

俺のコードネームは『ニコラス』に決定。先輩たちの任務にお邪魔することにした。

入隊から2日、新たに新入りが入ったとの連絡が入った。

嫌な予感が頭を過る。

コードネームは『ローザ』、防衛班第3グループ所属だそうだ。

急いでデータベースを調べる。情報漏洩を防ぐため本名は載っていない。なかつたのだが顔写真はあったからだ。

『綾…香…』

『あれ？知ってる子？じゃあさ！俺に紹介して…』

『いや！それは出来ません！…』

『…あ…おお…そう…か…』

何故先輩の要望を即答で拒否したのかは今でもわからない。

でもその時はそれ以上に綾香…ローザと話をしなくてはいけないという感覚に駆られた。

俺が彼女との面会アポをとりに行ったのはそれから3分と経たないうちだったと思う。

アポをとった翌日、俺らは面会した。

『突然呼び出してすまない…』

『別に気にしなくていいよ 私だってそのうちアポとってたと思っ
し』

やけに上機嫌な彼女に安心する。

1ヶ月前の事を引きずってなければ良いが…

『あと…1ヶ月前、トレーニングルームではすまなかった!!別に悪気があって言ったんじゃない…』

『心配してくれたんだよね?わかってるよ…ただ…』

そう言って口籠もる彼女…

しばらくの沈黙が流れる…

『ただ!私だって心配だったのよ!運動神経のない晃がここに入隊しようとしてるって山田さんから聞いた時…』

『ローザ!晃じゃない、ニコラスだ。それに俺なら大丈夫だ。確かにお前ほど運動神経があるわけでもないし頭もよくない。でも、ト

レーニングの成果が出たのか今は人並みに闘える。だから…この危険な場所から去ってくれ！」

『無理よ。こここの在処を知ってしまったかぎり去るってことは死を意味してるの。悪いけどここに残るわ。』

『……………そうか…時間をとってすまなかった。』

『ううん、別に大丈夫。帰るの？』

『ああ…』

『そう…じゃあまた生きて会おうね』

ガチャッ…

『生きて会おうね』…か…なんでそんなこと…

その後俺は自室で1人泣いていたのを覚えている。

(現実)

…JJJ…は？

「ニコラス君、大丈夫かい？」

…目の前にいるのは…誰だろう？

ぼやけた顔に焦点を合わせる。

「山田…さん…ですか？」

「そうだ。エリック君から君が撃たれたとの報告を受けたからな……」

撃たれた？……そうだ！思い出した！

……いや、待てよ……なんでだ？

「俺を撃ったのは……ローザなのか？」

「……………」

口籠もる。やはりそうだったのか……

「わかった。すまない……」

そう言つて立ち上がる。大した時間眠つていなかったのか、全然体が動かないということはなかったので安心した。

「おい！まだ体は……」

………つ！？

バタツ……

A n o t h e r s i d e

医務室に到着した。

ニコラス君は一番奥のベットで横になっている。

静かな医務室には彼の呼吸音のみが響き渡る。

「生きてたんだな……」

突然発せられた声。その声が自分のものと気付くまでには随分な時間がかかった。

…静かに流れる沈黙、この医務室の平和を感じさせる真っ白な内装はこの沈黙にさらなる安心感を与える。

「づう〜」

「ニコラス君！！大丈夫かい！？」

「……………」

まだ目が完全には覚めきっていないのか、遠くを見るように私の方を向いてきた。

…少なくともまだ焦点があっておらず私を認識出来ないのだろう。

彼が次の言葉を発するまでは黙って待つことにした。

「山田さん…ですか？」

「そつだ。君が撃たれたとの報告を受けたからな…」

目付きが鋭くなる。…やはり内部による犯行だったのだろう。しつかりエリック君の話の聞いておけばよかったなとつくづく思う…

「…俺を撃つたのは…ローザなのか？」

…！？

ローザ…藤咲が！？

いや、そんなはずはない。彼女と彼は小さい時からの幼馴染みだ。殺そうとするはずなんて…

「わかった…すまない…」

私が黙ってしまった故か彼は話を切るようにこう言い、立ち上がった。

「おい！まだ体は…」

治りきっていない。そう言おうとした時…

バタツ…

「まず…ニコラスが倒れたので復帰するまでは代わりに俺がリーダーということになりました。それで…ニコラスについてだが、ありがたいことに急所を外れていたようで、一命を取り留めたい。まあとにかく……」

ニコラス君が倒れたということでエリック君が臨時リーダーということになった。

今はその報告スピーチが行われているところだ。

ちなみに私はたまたま通りかかったので見物することにした。といった理由でここに立っている。

「エリック！誰がニコラスを撃つたんだ！？」

「それが…わからないんだ。集会解散直後だったから一応全員現場にいたようだが、見事なくらい目撃者はいないんだ。しかも異常な早さで防衛班が到着して現場を閉鎖されてしまったから…」

「ねえ…私見てただけど…」

「だ、誰だったんだ！？どこの兵だ！？間違いでもいいから言うてくれ…！」

「私の目が確かなら…」

I n s i d e

はあ…もう嫌になっちゃったんだけど…

だってさ！やっと休めると思ったら何！？緊急事態が発生したから集まってくれ！？

さすがイヤミーさんだよ！

それにさ、雰囲気最悪じゃん！殺意がヒシヒシと伝わってくるよ！！

絶対他の人たちも不満なんだよ！じゃないとこんな雰囲気形成されないから！

「みんな集まったかな？…いきなり集まってもらってすまない。まあみんな知ってると思うが…」

あれ？イヤミーさんじゃないの？

ああ…でも見たことあるこの人！誰だっけ？

『「自分たちで見届けるだろ？（キラーン）」の人ではないのか？』

あああああ！そっだよ！

思い出した！めっちゃナルシストな人じゃん！！

ナルシさんじゃん！

『何か話そうとしてるけどいいのか？』

あっ……本当だ……

「……が撃たれた。」

えええええ！！？

ミスった！！完全に聞き逃した！

えっ…えつと…誰？誰が撃たれたの！？

「…まあ、この話は一旦おいといて…すまないが先に挨拶を済ませてもらう。まず……」

はあああああ！？

えっ！何！？『仲間が撃たれた』の下り5秒で終わりなの！？

やっぱりやばいよこの人たち！絶対危ないよ！

だってイヤミーさんだって見事な嘘をついて誤魔化してたもん！

命の重さ分かってないよ！

「まず…ニコラスが倒れたので復帰するまでは代わりに俺がリーダーということになりました。それで…ニコラスについてだが、ありがたいことに急所を外れていたようで、一命を取り留めたらしい。まあとにかく……」

ああ…イヤミーさんが撃たれたのね…だからナルシさんがリーダーになったわけですね…一応納得しました。はい。

「エリック！誰がニコラスを撃ったんだ！？」

「それが…わからないんだ。集会解散直後だったから一応全員現場にいたようだが、見事なくらい目撃者はいないんだ。しかも異常な早さで防衛班が到着して現場を閉鎖されてしまったから……」

……

うん…ちょっと待てよ…まずいことに気付いた気がするのは俺だけかな？

今、『集会解散直後、イヤミーさん、撃たれた』で俺の脳内を検索した結果一件該当しましたよ！

あの〜試作品の武器あったじゃないですか？あれさ…イヤミーさんに向けて撃っちゃったんですけど…

…やばい！！絶対やばい！！死亡フラグ立っちゃったんじゃないの！…？ってくらいやばいよ…！

でもさ！！網が出てくるって聞いてたんですけど…？…うん！！そ
うだよ！！網って聞いてたから俺は撃ったんだよ！！全部イヤミー
さんが悪いんだよ！！

「ねえ…私見てたんだけど…」

ぎゃあああああああ…！

ストップ！！ストーーーーップ！！

それ以上言ったら許さないよ!!!二等兵(笑)の名にかけて全力であなたを抹殺しに行きますよ!!!たぶん出来ないけど...

「だ、誰だったんだ!?!どこの兵だ!?!間違いでもいいから言ってくれ!?!」

「私の目が確かなら...」

あああああ!!!やめてー!!!

「防衛班の一員だと思う。私の見たユニフォームは防衛班のものと酷似してたし、あの近距離で急所を外すのは一般じゃ考えられない。潜入してきた外敵だったとしたらなおさら不自然です。他にも、防衛班の到着の異常な早さなどを考えればそう考えるのが自然なのは?」

.....あれ?.....よかった.....んだよね?

イエーイ！！！！なんかわかんないけど探偵気取り女のおかげで助かったよ！！

あつ…探偵気取り女ってのは今話してた人ね。たった今命名した。

「防衛班…許さない…リーダー！！俺を狙撃要員で…」

「駄目だ！！そんなことをして何になる！？無駄な争いを繰り返すだけじゃないか！！」

「でも！！！！」

「ステイプ！！一回落ち着け！！…実際ニコラスも負傷したものの死んではない。でもだ！もし俺らが防衛班に乗り込んだらどうなる！？向こうも反抗してくるに違いない。そうならば負傷どころでは済まないかもしれないぞ！！」

「う…う…」

…へえ…

なんかさ…ナルシさんの言ってた言葉聞いたことある気がするんだけど？いわゆるクサイ言葉ってやつじゃないかな？

それにさ…復讐を誓うキャラみたいな発言した人ステイブさんだったの！？

あの人セフ　ロスさんのときはそんなこと言ってなかったのにこの数時間の間にどんな心情変化があったわけ！？

「まあ、とにかく…」

ドゴオオオオ！…！

…っ！…！

衝撃と襲撃

Another side

ドゴオオオオオ!

突如鳴り響く轟音。隊員各々が即座に戦闘態勢に入る。

しかし、私は麻醉銃以外の武器を所持していない。

その結果残念ながら私は安全地帯…中央コアへ避難する以外にすべきことを見つけられなかった。

スタタタ…

中央コアへ到着する。

轟音は先程の1度きりだったらしく、あれ以降それらしき音はなっていない。

ピッピッ…ピー…

…早いな？

私が中央コアのドアを開けた瞬間に聞こえた音…警戒レベルが下がった事を知らせるこの音が鳴ったということはつまり安全が確保されたということになる。

…ということ、到着早々だが早速調査班に現状を聞きに行くことにしましょうか。

中央コアとBコアの連絡橋（O - B連絡橋）の近くに着いた。

20M程先の曲がり角を曲がればO - B連絡橋、それを渡れば主力調査班が集まるBコアに到着する。

ちなみになぜ連絡橋があるのかと聞かれればそれはこの施設の構造的な問題と答えることになるだろう。

まず、この施設は海上に浮かぶように位置している。

： 本来なら随分自立つ施設であることは否定できない。それなのに目撃情報が流出しないのは、施設全体に裸眼ステルスを施し、さらには周囲には人工的に渦を作ったためである。

どの施設を探してもこんな施設は他に無いだろう。

そして、中央部に聳え立つのは高さ98.5Mの中央コア、そしてその周りを囲うように50.0Mの各コアが六角形になるように中央コアと接続している。

さらに各コア同士も2つ隣のコアまでは連絡橋で接続されていて、中央コアをまたぐ逆方向のコア以外は1度に移動することができる。例えばEコアの場合、Bコア以外なら1度で移動出来るというわけだ。

ちなみに補足で、中央コアと各コアの連絡橋の長さは50M、各コア同士の連絡橋の長さは50Mないしは約86、5Mである。

…ところで、先程の轟音は何だったのだろうか？鯨が誤って施設の足に衝突したとでも言うのだろうか？

…容易な推測を立てる。謂えども鯨も哺乳類である以上よくあることではあるのだが…

しかし、そのあとすぐにその予測が大きく外れていたことに気付かされる。

「な…なんとということだ!？」

驚いた事にO - B連絡橋が崩壊、Aコアは半壊していたのだ！

炎上している事と、崩壊具合から見て敵襲であることはほぼ間違いないだろう。

そう考え、Aコアにいる調査班に連絡しようと思つた中央コアに戻ろうとしたその時

「山田さん…俺が寝てる間に何があつたんですか？」

…ニコラス！？

O u t s i d e

轟音によって目が覚めた。

それもそんなに遠くない位置から聞こえるもの…

…何があったんだ!?

立ち上がる。今回は目眩もしなかったし痛みもなかった。

…よく考えてみればこんな短時間で動けるようになった自分は相応すらいと思う。

ガチャッ…

医務室から出る。出た先は中央コアだったはずだ。

白い部屋から突然真っ黒い部屋に移動した所為もあってか一瞬目が眩み立ち止まったがすぐに歩きだす事が出来た。

ピピッ…ピピッ…ピピッ…ピピッ…ピピッ…

…っ!?

今の音は…敵襲！？

二連音が2回…Bコアへの襲撃のようだ。

…よく考えればこの場所はかなりBコア寄り…早くEコアに戻らなくては…

カツッ…カツッ…

遠くから聞こえた歩く音…Bコアの方だ。

カチャッ…

すぐに戦闘態勢に入る。

敵襲ならば潜入してきた者がいてもおかしくないからだ。

…まあ、あいにく麻醉銃しか携帯していないのだが足止めにはなる。

壁に背を付けながら銃を構える。

そつと奥を見る…

しかしそこには外を眺める敵とは思えない1人の男性が立っていた。

「…山田…さん？」

そう。そこに立っていたのは紛れもなく山田紳志だったのだ。

山田さんにならって自分も外を眺める。

「俺が寝てる間に…何が…あつたんですか？」

無意識に口からこぼれた言葉。

それもそのはず。

外を眺めると橋が崩壊していて、それどころかBコアすら半壊していたのだ。

「……………」

一旦は振り向いたがすぐにまた顔を戻し、黙ってそれを眺める山田さん。

その横顔は何かを告げようとしているようにも思えた。

…ちよっと待てよ？

スタタタタッ！！！

「はあ…はあ…」

いきなり走りだした所為もあってか着いた頃には体力が限界に達していた。

「…ニコラス！？どうしてこんなところに！？」

そう。向かった先はEコア…エリック達のところだ。

「説明は後だ！！…エリック！お前は今すぐBコアにいた調査班をこのコアに受け入れるよう手配しろ！それから…」

「ちょっと待て！…何かあったのか？さっきの轟音に関連したことがあるのか？」

「…えっ？さっきの放送聞いてなかったのか？」

「…いや、そんなはずはない。放送はどのコアでも聞くことが出来るはずだ…」

「何も聞こえなかったが…」

「…なんという…どうして？」

「…ま、まあいい…とにかくだ！Bコアが敵襲にあった。詳しい話も知りたいから調査班をこのコアに受け入れて情報を入手する。一番これが効率がいいだろ。」

「わ…わかった…」

「それと、もしこのコアに情報が伝わっていないとすれば他のコアも例外じゃない。調査班を受け入れる手続きを終えしだい防衛班に連絡をして…」

「ちよつと待つてくれ…防衛班つて…嘘だろ？アンタを撃つたのつて防衛班の一員なんだろ？」

俺の言葉を遮つたのはステイブ。そして俺はその言葉に言うべき言葉を失いかける。

「いや…でもだ…リーダー命令だ。従つてもらつ。」

苦しくもどうにか言葉を返す。その言葉が彼、ステイブに確信を与えていたとは知らずに…

「やっぱりだったのか…やっぱり防衛班の誰かがリーダーを撃つたんだな！？…許せない…許せない！！」

「ステイブ！落ち着け！！確かに俺を撃つたのは防衛班の誰かかもしれない。でも俺は生きているんだ！死んでない！でも今みたいな緊急事態で内争してたらどうなる！？下手すれば全滅だぞ！！」

「…わかったよ。さすがリーダーとリーダーの代理をした人材だ…」

「わかってくれたか…」

「じゃあ…俺は戦闘に備えて待機してるよ…」

…どうやら丸く収まったようだ。

ステイブはそれだけ言って自室に戻って行った。

「じゃあエリック。さっき言ったことを…っ！？」

バタツ…

I n s i d e

あのさ…何ていうんだっけこれ？

『遭難』

そう！遭難！

なんか変な音聞こえたじゃん？

そしたらみんな武器だしていかにも戦闘態勢って感じになっちゃってさ…

でも1人だけ戦闘態勢に入っていない人いたわけよ！

まあステルスのおっちゃんなんだけどね…

で、そのステルスのおっちゃん逃げ出したから俺もついていけば
どうにかなると思うてついてったわけよ！

そんでもってついてきたら現在に至ります。

もう嫌になっちゃうよね…ハハハ…

多分30分はここでじっとしてるよ…

『でもよく見てみる！何か綺麗だぞ！』

…へ？

『この一面に広がる海！そして満点の星空！結構すごいんじゃない
のか？』

…うん、確かに綺麗だと思ってたよ。

でもね…

なんで俺は海の上にいるの!?

絶対おかしいでしょ!?

だってさ?ここ俺の部屋から徒歩10秒だよ!?

言うなれば駅から徒歩11分くらいだよ!!

『だから、なんか魔法っぽいものを…』

いや!認めないよ!俺は魔法なんて認めてないよ!!

『ま、まあ…とりあえず誰か来るの待てば?そのうち誰かしら来る

と思うぞ。』

あの人たちは絶対そんなことしないよ…

むしろ来たらその人神様って呼ぶよ…

「よう！新入り！！…どうしたんだ？こんなところまで。」

……神様来た〜！！！！

言ったそばから来たよ！！！！

…あつ…ステイプさんじゃん！

さすがだよ！

「いや、迷子に…」

助かった…これで帰れ…

「そうか、頑張れよ！」

ええええええええ！？

何！？？どういふこと！？？

アンタが聞いてきたんだよね！？？

今の反応明らかにおかしいよね！？？

…いや、逃がすわけにはいかないよ！俺だつてこんなところで死にたくないもん！

「ち…ちよつと待って！帰り道だけでも教えて…！」

「ああ…すまない…Eコアならこの橋を戻ったところだぞ。じゃあ時間無いから…」

スタタタツ…

…どっか行っちゃった…

まあいいや、とりあえずこれで帰れるし…

えっと…先程はお騒がせして申し訳ございませんでした。

あれからまっすぐ30秒ほど歩いたら到着しました！

ガチャッ…

よかった…これでやっと帰れるよ…

びわびわ…

…あれれれ？

………

めっちゃ増えてる〜！！！

なんで！？イヤミーズ増えてない！？

俺が遭難（笑）してた間に何があったの！？

それにイヤミーさん運ばれてきたみたいだし！！

まあ椅子何個か並べてその上に横たわってるけど…

…いや、待て待て！！

いかにでしょ！！

復活もしてない重症（？）の患者を無意味に引っ張りだしてきちゃダメでしょ！！

それに連れてくるのわかってたならベッドくらい用意できたでしょ！？

椅子なんか寝かせちゃダメだよ！！何て言っただって一応撃たれて

るんだから!!

バンツ!

…っ!?

いや、銃声じゃなくて机叩く音ね。

「くそっ!!何で電話に出ないんだ!?!」

…あれ?ナルシさん?

誰に電話したの?元カノとか?

「ああ！！回線ごと切りやがったな！悪いのは向こうなのに！！」

…当たってた〜！

間違いないよ！あの人絶対元カノに連絡してるよ！

こんな大勢の前で大声で元カノに連絡してるよ！

しかも、回線切られるって相当だと思うよ！！

それにさ、そういう過去の無い俺でもさすがにわかるんだけどさ…

・回線切られた地点で諦めなさい！

・向こうが悪いと思ってる地点であなた自体が駄目ですよ！

うん、少なくともナルシさんは絶対わかってない！

今の調子なら100回は電話してそうだし…

元カノさん可哀想だな…

「…っ！？もういい！！直接言ってくる！！ここは任せたぞ！」

ええええええええ！？

仕事放棄して元カノに会いに行っちゃったよ！

リーダーたる者が何やってんだよ！？

『なんか、ナルシも可哀想に見えてきたから追いかけて手助けしてあげなさい!』

断る!

だって俺何にも関係ないもん!しかも、あれじゃあ明らかに不可能でしょ!!

どんな理由があってナルシさんとナルシさんの元カノとのよりを戻す手伝いをしなくちゃいけないんだよ!?

『使命感とか?』

あるわけねえ!!

まず俺がそんな使命感もってると思ったわけ?

『思った。』

いや、無いから。そんな献身的な人間じゃないから。

『じゃあ献身的な人間になりましょー!!』

…は？何言ってる…

スタタタ…

えっと…またもや迷子になりました！

しかも今回はなんか屋上のなところに来ちゃったし…

『綺麗じゃないか。満点の星空が…』

アンタは黙りなさい!!

そもそもアンタの所為なんだからね!そこんとこ反省しなさい!!

『…はいよ』

うん、素直でよろしい。

…で、如何にしてここから降りるかって事を考えなきゃいけないんだけど…

………

無理だよ!

だってさ！絶対高さ50Mはあるよ！！飛び降りたら即死級だもん！

それに階段みたいなものすらないし！

むしろどうやってここに来たのか知りたいよ！！

『私がよじ登らせた』

はあああああ！？

この高さをよじ登ったの！？

っというか、何故によじ登った！？

ごく普通の高校生が何の意味もなく壁をよじ登ってその先で途方に暮れてるんだよ！

何も知らない人が見たらビックリな光景だよ！

『まあ、そのうち誰かしら来ると思っぞ。』

さっきも聞いたよその言葉。

でもさ、考えてみるよ…

こんなツルツルな壁を誰が好んで登ってくるんだよ！？

『イヤミーさんと元カノとか？ほら、星は綺麗だし』

あれ？…イヤミーさん？ナルシさんじゃなくて？

『ああ、間違えた。』

なんだ…つまんないの…

スタツ…

スタツ…

スタツ…

…ん？

「おっ！…！」「丁寧にお出迎えがいるじゃん！…さすが！…！」

「龍刃…黙れ…」

…なんか怖い人たちが降りてきた…!!

敵襲と真相

O u t s i d e

.....

.....

..... はっ!？

「やっと目覚めたか…大丈夫か？」

「俺は?..どうして?」

「まったく無理するからだ。しばらくは安静にしてるよ。それと、見てわかると思うけど調査班の受け入れはエリックがしっかりやってくれたよ。」

…そうか！思い出した！Bコアの敵襲があったから急いで戻ってきたんだ！

それで、調査班を受け入れるのと防衛班に報告するのを指示したんだ！

「そうか、ありがとう。」

そう言って立ち上がる。この様子なら1時間と寝ていないのだろう。

うぐっ!？

…くっ…傷は完全には癒えていないようだ…

「だ、大丈夫か!？」

「全然大丈夫だ。気を遣わせてすまなかったな。」

歩きだす。別にあてがあるわけでもないが、何かしていないと気が済まないからだ。

「あ、あと…」

後ろから呼び止められる。

「エリックが防衛班が電話に回答しないからって直接言い言った」

…っ!?

スタタタタッ!!

「ちょっと！何をしに…」

気付くのが早かったか、動きだすのが早かったかはわからないが、俺はとにかく走っていた。

電話で連絡するだけなら危険は伴わないのだが、直接言いに行くとなると話は別だ。

何といっても俺を撃つた可能性がある班だ。決して安全が確保されているわけではない。

バンツ！！

どこからか響く銃声。とっさに音の聞こえた位置を特定しようとするまわりを見回す。

嫌な予感が頭を過る。

ドカーン!!

バシャーン!!

…!?

今のは?

大きな爆発音のあとに聞こえた水の音…まさか…

いやいやいや!!

危ないからしまいなさい!!そんな物騒な物しまいなさい!!

「なあ酷火?こいつ意外と避けるのだけは達者みたいだな?」

「知るか。殺したいなら殺してやってもいいんだが?」

「龍刃!酷火!あなたたち何言ってるの!?討伐対象はトップ層のみ、他の者は捕虜にして開発要員として従わせるんだから出来るだけ殺さないようにしないと…」

「美弾、確かにそうだけど…これで失敗なんかしたらもとも子もないんじゃない…」

それに、だったらせめて暁と隠狙を殺したやつくらいは…」

「うーん…確かにそれくらいなら…」

「龍刃…暁を殺す手助けをしたやつと隠狙を捕虜した奴なら知ってるが？」

ギロツ…

……………えっ？俺？

「さすが酷火！いいなあ〜過去が見えるって…」

ええええ！？

過去見えるの！？

え？それで何？俺の過去を見た結果俺が犯人なわけ？

いやいや！！あり得ない！

だってさ、セフ　ロスさん撃つたの明らかにイヤミーさんだし、「オソソ」って人に関しては姿、形、声すべて知らないよ！？」

「じゃあこいつだけは殺ってもかまわないんだな？」

いや〜！！どー考えてもダメでしょ！！

過去が見えるなんてほざいてる探偵気取り男の勘なんかで犯人に仕立てあげられて殺される人の気持ちになってみな！？」

それに探偵気取り男さんは自分のめちやくちな推理を少しでも疑ったりしないわけ！？

「…かまわない。」

ですよ〜…

過去が見えるなんて言ってる地点で普通の判断を求めべきじゃないよね…

「っしゃああああ！！死ねええええええ！！」

ええええ！？

襲ってきたよこの人！！

どうすればいいの！？

『避ける！！この角度で斬り掛かってきたんだから二歩後ろにステップしてしゃがめば避けれるはずだ！！』

ほ、本当だな！？信じていいんだな！？

『高等知能生物を信じなさい！！ちゃんと理屈もあるから大丈夫だ
！！』

わ、わかった…とにかくやってみるよ…

サッサッ…

二歩のバックステップ。タイミングとしては相手が太刀みたいなが
めの剣を振りかざそうとした時だ。

ヒュッ…

剣の先が目の前で空を斬る。が、その直後、すぐに太刀は方向転換
してくる。

サッ

ヒュッ…

またもや剣の先は俺の頭の上で空を斬る。不意討ちをしたと思ってるドヤ顔が引き締まったのが見えた。

「おお…なかなかやるじゃねえか？」

うおお！マジだ！！おっさん初めて役に立ったんじゃないの！？

『初めてとは失礼だな。私だって本当は素晴らしい運動神経を持っているんだぞ！発揮できないけど…』

まあ何て言ったって高等知…

『左に回避!!』

…え？

『早くしろ!!』

わ、わかった…

ていやあ!!

ダンッ!!バババンッ!!ドカーンッ!!

……!!

『な？そこにいたら死んでたではないか？』

な、何したのこの人たち…

『何ってそんなこともわからなかったのか？』

うん。なんかすごい連撃が繰り広げられたのはわかった。

『全く！これだから下等知能生物は…』

いや、人間は下等知能生物ではないからね！アンタからみたらそうでも自然界全体で見たら割と高い位置にいるからね！

…っつーか、早く何があったか教えるよ！

『そうだな…簡単に言えば…龍刃が背中に背負ってた太剣を地面（本来は君）に叩きつけて、そしたら美弾がハンドボールのシュートの時みたいに飛び上がりながら銃を乱射して、最後に酷火が何かをして爆発を起こした。』

何かって何！？過去の透視に引き続きまたなんか超能力を使うわけ！？？

『多分グレネードだと思うが…』

あっ…そうなの？…何か名前からして火を操れそうな気がしたから魔法か何かだと…

『全然違うぞ！全く、そんなことを言っているから下等知能生物なんて呼ばれるんだよ』

いや、呼ばれてないから！…っーか俺の名前はいくつあるんだよ！？

『とりあえず108個挙げようか？』

結構。108回も悪口言われちゃたまらないからね！

『あつ…何か話そうとしてるぞ』

あつ、おお…

「あなた、私達のコンビネーション技を回避できるなんてなかなかね？」

「ああ、避けられたのは初めてだ…」

……

……

…しーん…

白けた~~~~!!

龍刃さんが続けて何か言ってくるものだと思ってたから完全に無視しちゃったじゃん!

……

……

……しーん……

「……………グスツ……………」

やべえええ〜!酷火さんの目が少しキラキラしてきちゃったじゃん!??スベったの絶対引きずってるでしょ!??

誰か反応してあげて!!

「ふっ…さすが、冷酷の獅子と名付けるのにふさわしい人材だと聞いたが本当にそうみたいだな…」

……

……

…しーん…

本当に誰か反応してあげてー！！今は冷酷の獅子とか言い始めた酷火さんも悪いかもしれないけどそこをフォローするのが仲間ってやつでしょ！？

「……………」

あっ…目に割と大粒の涙が…

ちよっ！…どうにかしてあげてよ！！仲間でしょ！？…これだけ見えて

自殺したよこの人！！1回スベっただけで自らの命を断つたよ！！

「こ、酷火！！何やってんだよっ！？どうしてそんなこと…」

いや〜…わかんないのかな？アンタらが無視し続けたからそれを気にしてだよ！！

「酷火…わかってるよ…あなたがそんなことした理由…プライドが許さなかったんだよね？」

あっ…美弾さんだけ？わかってるじゃん…

「昨日部屋で1人飛び跳ねてたの見たの、そんなに気にしてたんだね…」

はあああああああ！？

ちょっと待って！飛び跳ねてるっておかしくない？

えっ…何？

あんなクールにしゃべっておいて部屋で1人飛び跳ねてたの！？

「酷火…なんでそんなことで…」

いや、違うからね…そんなことがあったのかもしれないけど今回の自殺に関する原因は仲間からのシカトだからね！

「酷火…」

うーん…場面的には凄く凄くシリアスだけど理由が理由だからな…

「そういえばさ、今だから言えることなんだけど…アイツ昔から飛び跳ねるの好きでさ…しょっちゅう飛び跳ねてたんだよな…」

…あれれ？なんか方向性おかしくなってきたくない？

それにしょっちゅう飛び跳ねてたならそれを見られただけで自殺するはずはないとか考えないの!？

「それで、中学の頃からそれをコンプレックスに感じ始めてたらしくて飛び跳ねるのは自分の部屋とかのプライベート空間だけにするって決めてたんだって…」

コンプレックス!？飛び跳ねるのがコンプレックスなんて初めて聞いたよ!!

それにコンプレックスでも飛び続けるの!？プライベート空間といえどもおかしいと思うよ!!

「そうだったんだ…でもさ…この前風呂場で飛び跳ねてたの見たけど？」

「ああ、俺だつて自販機の前で飛び跳ねてるの見た…本人には申し訳ないが、結局自分を制御出来てなかったのかもな…」

ストローップ!!これ以上はやめよう!!死人を責めるのはあんまり良くないと思うよ!!

それに、飛び跳ねるのを制御できないのも変だけど、死んだ理由は別にあるからね!!

…あれ?ちょっと待てよ?なんか不思議な点に気づいちゃったのは俺だけかな?

…あの…何で美弾さんは風呂場で飛び跳ねてたのを目撃しちゃってるわけ!?アンタ女じゃん!!それだけ聞くと単なる変態だよ!!いや、その他諸々聞いてもきつと変態なんだろうけど…

まあ、確かに風呂場で飛び跳ねてるのもおかしいけどさ…それを見
たって公言しちゃったアンタも間違いないよおかしいよ…！

「あつ…あと」

(省略。しばらく酷火さんの飛び跳ね現場の目撃情報を二人で交換
し合っています。)

あのさ…俺ずっと棒立ちなんだけども…完全に立ちすくんじゃって
るんだけどさ…怒ってもいいんだよね？

「こう考えてみると酷火はいろんな場所で飛び跳ねてるのね？」

おっ！！やっと話が終わりそうだ！！自分でここから降りられない
以上この人たちを説得するしかなさそうだからね…

「あつ！！そうだ！！あと…」

まだ続くのかあああああああ！？

O u t s i d e

タッタッタッタッタ…

はあ…はあ…

急いで中央コアの階段を駆け上がる。休養明けからよくここまで走れるなとつくづく自分に感心する。

ちなみに、なぜ階段を駆け上がったのかというと、それは爆発音と水の音が鳴り響いた時、音がどこからしたのかと周りを見渡したらFコアの上にシュウが立っていたからだ。

水上から70M近くのところまで登る。ここからならFコアくらいまでなら飛び移れるだろう。それに来る途中、中央コアで衝撃軽減スーツと短距離飛行用グライダーを借りてきたから着地は余裕だろう。

多少準備運動をして万全の状態に自分を持っていく。

そして…

「シュウ〜!!!今行くぞ〜!!!」

飛んだ。

I n s i d e

はあ…このやり取りいつまで続くんだろ？

『続くっていつか…』

あっ…やっぱりアンタも気づいてた？

『気づくも何も聞いていればすぐにわかることだろうっ？』

まあね…

「だ・か・ら！！！！あなたが全部悪いのよ！！支部長が怒ってたのと私は一切関係ないからね！！」

「何で俺なんだ！？それに！！支部長が怒ってたのはお前の言い訳がましいあの態度が原因としか考えられないぞ！！…！！」

あの…いつからかは正直覚えてないけどなんか二人ともヒートアップしちゃって…今はこの有様ね？ははは…

『そろそろ帰って休みたいんだが？』

そうだな、帰ろう…ってアンタはアホか！？

こんな意味分かんないところによじ登らせたのはアンタでしょ！？
それに急に降りれないとか言い出す有様だし…

『うーん…その、それは…』

まあいいよ…俺もそんなに鬼じゃない。

条件さえ呑んでくれれば許してあげるよ…

『…条件とは？』

うーん…そうだな…

「秀〜!!!!」

ドブヘツ!!!!

「おつとすまない…大丈夫かい？」

「だ、大丈夫なわけないだろう…」

息も絶え絶えに言う。…っというか普通に考えて不意打ちで背中に飛び蹴り喰らって平気な人なんてほとんどいないから!!

「おつと！討伐対象のお出ましじゃないか！遅かったな!!」

「待たせてすまないな。…とはいえ約束なんてした覚えないけどな。」

「ふん、やっぱり。暁から聞いた通りじゃないの?」

「ああ。雑魚だな」

……

なあおっさん?

『ん?どうしたんだ?』

さっきの条件なんでもOK?

『出来ることなら...』

じゃあさ...一時的に俺の体コントロールするの許すから...いつら倒

しちゃってくれない？気絶でいいから…

『なんだ。そんなことか？お安い御用だな』

おっ！！頼みますよ！『高等知能生物（笑）』さん

『よおし！！任せとけ！！』

「おいテメエら！！よくもニコラスを殺ってくれたな！！これでタダで済むと思うなよ！」

「はっはっは！！今更何を言っているんだか？俺の剣に勝るものは…どはっ！？」

まさに一瞬だった。相手が話している途中、その中でもさらに手が一瞬緩んだその瞬間に俺（笑）が間合いを素晴らしい速さで詰めて顔面に一撃したのだ。

「ぐっ……なんてことを……美弾！！後方からの援助を頼む！！」

「了解……任せなさい……！」

「どりゃああああ……！」

「きゃあ……！」

「よ、よくも……！」

「ニコラス……！今助け……きゃああ……！」

「………」

「なっ、何っ！？？」

「どりゃああああ……！」

「ぐはっ…」

…ありゃま…俺の脳が処理落ちしかけてる…

えっと…何が何で何が起きて何がどうなって誰がどうなったわけ？
… AがBでCしてDがEしてFがGした。

それに、なんか知らない人入ってた気がするの、は気のせいかな？…
気のせいだ。

俺は今何を考えてるの？…人生観

…だめだ…完全に俺の脳壊れた…

『ふう…終わったぞ。』

ええ！？早っ！！…っっていうか、もう終わったの！？二人とも倒しちゃったの！？

『いや、三人だけど…』

はあ！？…えっ！？やっぱり知らない人の声が聞こえてたのは気のせいじゃないわけ！？

『気のせいではないと思うぞ。』

だよね…『ニコラス！今助け…きゃあ！！』とか言ってたもんね…

『人間いつかは死ぬものだ。それが今だったと思えば仕方ないのではないだろうか。』

…ちょっと待て…

あの〜…なんかすごい他人事なんだけどさ…

『他人事だし…』

いや！他人事じゃないよ！殺ったのアンタじゃん！

『秀という名の私だけだな』

おい！何ということを！

「しゅう」

やべっ！…誰か起き上がりそうだよ！誰が発した声なのかは全くわからないけど…

「ふふふ…なかなかやるじゃないの…」

あつ…美弾さんだね。きつと…

「…ふふっ…さすが、冷酷の獅子と名付けるのにふさわしい力の持ち主ね…」

美弾さんまで言い始めた！

ダメだこの人たち！絶対頭のネジ2〜3本外れてるよ！

……

……

…しーん…

やっぱりだ〜！なんとなく予想出来たけどやっぱりだ〜！

……

……

…グスッ…グスッ…

あ〜あ…まあこつなるとは思ってたけど…

「酷火！今から行くから待っててよ！」

ヒュ〜〜〜ポチャン…

……また死んだ〜！！

何この人たち！？スベったら死ぬっていう決まりなわけ！？

「はっ！！美弾！！どこにいる！？」

周りを見回す龍刃さん。落ちたの知ったらがむしゃらに襲ってきそ
うで怖いな……

「も、もしかして！！……おい！さっき美弾が飛び降りたりしてなか
ったか！？」

「……………」

『おい……なんか聞かれてるぞ……』

……ん？マジで？今の俺に対してなの？

『多分…確証はないがな…』

じゃあいいや…大事な用事ならもう一度聞いてくるだろ…

「……………」

「くそっ!!俺だつて!!…酷火、美弾!!今から行くから待ってるよ!それと美弾!愛してる!!」

えっ!?!ちよつと待って!!!

なんでこんな突然愛の告白をしちやってるわけ!?

ヒュ~~~~ポチャン…

こうして屋上にあつた7輪の小さな花のうち6輪が散つた…命といふ花5輪と愛の花1輪が…

それから数日後、なぜだか俺は表彰された…

どうやら先日の3人組（あの、よくわかんないキャラだった人達…）はイヤミーズを陥落させようとしていたらしい。ほら、ここ施設的には凄そうだし…

あと、イヤミーさんを助けにきた女の人はイヤミーさんの元カノだったらしいです。リア充は死ねのいい例ですね。

で、その二人を気絶させてしまった事に関しては被害を最小に抑えるためのいい判断だったと言われました。（わざわざみんなの前でご丁寧…）

それに、俺がイヤミーさんに向かって撃ったなんとか20000って
いう銃は、その瞬間に天井から降臨(?)した穩狙さんに当たって
捕獲に大いに貢献したそうです。

ちなみに、どうやら俺は一等兵(笑)になったそうで、なんかこれ
からはいろいろな特典が貰えるらしいです。(どうせ嫌味と誹謗中
傷の言葉を貰えるんだろうけどさ!)

まあとにかく、これからは出来るだけここには来ないようにしよう
と思います。はい。

だつてさ...

「秀！緊急任務だ！早く準備を！」

もういやだ〜！〜！

こうして俺の変な組織生活は続くことになった。

敵襲と真相（後書き）

ここまで読んでくださった皆さん。改めてお礼を申し上げます。まことに勝手ながらこれにて物語は完結となります。が、出来れば外伝としてシリーズ作品を書こうと思っています。いつになるかはわかりませんが、待っていただけると光栄です。繰り返しになりますが、ここまで読んでくださった方、感想を下さった方、評価してください。お気に入り登録してください。本当にありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6691p/>

脳内ペット

2011年2月12日13時50分発行